

# 一次遺跡

発掘調査報告書

1989年

箕輪町教育委員会

# 一之沢遺跡

1989年

箕輪町教育委員会

# 序

箕輪町教育委員会

教育長 堀 口 泉

沢川に箕輪ダム建設が計画された時から、地域一帯の埋蔵文化財の保存について検討され、昭和59年にはその分布状況調査が実施されております。

以来、毎年のように谷間のどこかで発掘調査が行われてきました。昭和62年度には、この一之沢地籍が調査対象となり、2000m<sup>2</sup>余を全面調査し、記録保存することになったのです。

その結果は、それまでに発掘調査を終了した長岡新田の各遺跡と平行する状況であり、平安時代後半の集落跡が中心のようあります。調査の内容については、本文に詳述してあるところです。この調査により、新田の谷に古くから人々の生活があり、活動したことが明らかになりました。

調査地は、ダム建設に伴う残土により、厚く埋ってしまい、まず、二度と見ることのできない状況となってしまいました。本書を中心とした記録や遺物が、長岡新田の歴史を記す一助となれば幸いに存じます。

終りに、調査にご協力下さいました調査団の皆様方に深く感謝申し上げ、序といたします。

## 例 言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪1847番地に所在する一之沢遺跡の報告書である。

2. 本調査は、長野県伊那建設事務所の委託を受け箕輪町教育委員会が実施した、

発掘調査は昭和62年9月22日～10月25日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の執筆作業を行った。

作業分担は次の通りである。

土器の復元－福沢幸一、竹入洋子 遺構実測図の整理－竹入洋子 根橋とし子 土器・石器・鉄器実測・トレー－ス－竹入洋子 根橋とし子 宮脇陽子 土器拓影－山内志賀子 撥図作成－竹入洋子、柴登巳夫 写真図版の作成－柴登巳夫、根橋とし子

3. 本書に掲載した遺構の写真は、柴登巳夫が撮影したものを使用した。遺物の写真は赤松茂が撮影したものを使用した。

4. 石器については樋口彦雄氏、土器・陶器類については小平和夫氏にご教示いただいた。

5. 本書の執筆は、柴登巳夫、赤松茂が行った。

6. 本書の編集は発掘調査団が行った。

7. 本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

# 目 次

題 字	調査団長 樋口彦雄
序	箕輪町教育長 堀口 泉
例 言	
本文目次	
挿図目次	
図版目次	
第Ⅰ章 遺跡の立地.....	1
第1節 位置.....	1
第2節 自然環境.....	2
第3節 歴史的環境.....	3
第Ⅱ章 発掘調査の経過.....	5
第1節 調査の契機.....	5
第2節 調査の概要.....	5
調査團.....	5
発掘調査團員.....	5
調査に関する事務局の構成組織.....	6
第3節 発掘調査日誌.....	7
第Ⅲ章 発掘調査の結果.....	11
第1節 調査結果の概要.....	11
第2節 遺構.....	12
1. 遺跡周囲の状況.....	12
2. 住居址.....	14
1) 第1号住居址.....	15
2) 第7号住居址.....	16
3) 第2号住居址、第21号土塙.....	16
4) 第3号住居址.....	16
5) 第4号住居址.....	17
6) 第5.6号住居址.....	18
3. 堀立建造物址.....	20
4. 土塙.....	22

イ) 第1.2号土塚	22
ロ) 第3.4号土塚	22
ハ) 第5号土塚	23
ニ) 第6.7号土塚	24
ホ) 第10.11.12.18号土塚	24
ヘ) 第14号土塚	25
ト) 第15.16号土塚	26
チ) 第13.17号土塚	27
リ) 第8号土塚	28
ヌ) 第19.20.22号土塚	28
ル) 第9.23.24号土塚	29
ヲ) 第27.28.29.30号土塚	30
ワ) 第26.33.34号土塚	31
カ) 第32.35号土塚	31
5. 配石土塚墓	32
<b>第3章 遺物</b>	<b>33</b>
1. 縄文時代	
1) 土器	33
2) 石器	35
2. 平安時代	
1) 土器	35
2) 鉄器	39
<b>第IV章 まとめ</b>	<b>40</b>

## 挿 図 目 次

第1図 位置図.....	1
第2図 遺跡周辺の地形.....	2
第3図 周辺遺跡分布図.....	4
第4図 調査区全測図.....	13
第5図 第1・7号住居址実測図.....	14
第6図 第2号住居址・第21号土塙実測図.....	15
第7図 第3号住居址実測図.....	17
第8図 第4号住居址実測図.....	18
第9図 第5・6号住居址実測図.....	19
第10図 掘立建造物址実測図.....	20
第11図 土塙群全測図.....	21
第12図 第1・2号土塙実測図.....	22
第13図 第3・4号土塙実測図.....	23
第14図 第5号土塙実測図.....	23
第15図 第6・7号土塙実測図.....	24
第16図 第10・11・12・18号土塙実測図.....	25
第17図 第14号土塙実測図.....	25
第18図 第15・16号土塙実測図.....	26
第19図 第13・17号土塙実測図.....	27
第20図 第8号土塙実測図.....	27
第21図 第19・20・22号土塙実測図.....	28
第22図 第9・23・24号土塙実測図.....	29
第23図 第27・28・29・30号土塙実測図.....	29
第24図 第26・33・34号土塙実測図.....	30
第25図 第32・35号土塙実測図.....	31
第26図 配石土塙墓実測図.....	32
第27図 出土繩文土器拓影図.....	33
第28図 出土石器実測図.....	34
第29図 出土土器実測図1.....	36

第30図 出土土器実測図2	38
第31図 出土鉄器実測図	39

## 付 表 目 次

付表1 出土土器一覧表

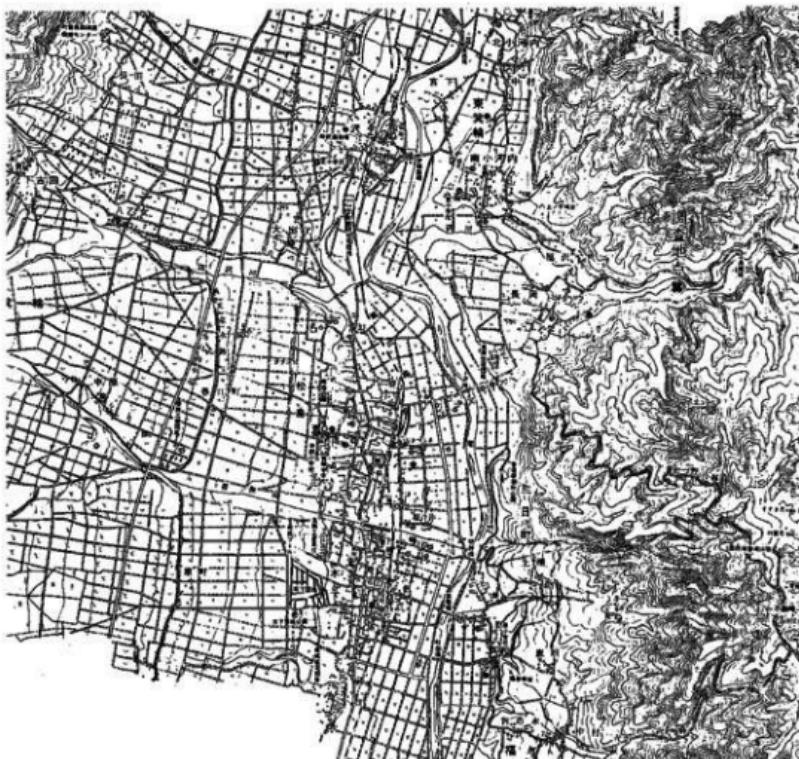
## 図 版 目 次

- 第1図版 遺跡遠景近景
- 第2図版 調査区全景・グリッド状況
- 第3図版 1・7号住居址、2号住居址
- 第4図版 3号住居址、4号住居址
- 第5図版 5・6号住居址、掘立建造物址
- 第6図版 配石土塙墓上面・配石土塙墓
- 第7図版 7号住居址カマド
- 第8図版 4号住居址カマド
- 第9図版 5・6号住居址カマド
- 第10図版 1・2・3号土塙、6・7・8号土塙
- 第11図版 9号土塙、14号土塙
- 第12図版 17号土塙、18号土塙
- 第13図版 調査状況
- 第14図版 遺物出土状況1
- 第15図版 遺物出土状況2
- 第16図版 調査風景
- 第17図版 出土繩文土器1・2
- 第18図版 出土石器
- 第19図版 出土土器1
- 第20図版 出土土器2
- 第21図版 出土鉄器・出土鉄滓
- 第22図版 調査参加者

# 第Ⅰ章 遺跡の立地

## 第1節 位 置

長岡の一之沢遺跡は長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪1847番地に位置する。天竜川東側段丘上に位置する長岡区と南小河内区福沢地籍の間に流れ出す沢川に添って開かれた地籍である。長岡区の東北の最も奥の場所から所開橋に至る道が開かれているが、その道に添って約500mほど寄った所の道下に、水田と畑が約2ヘクタール程の広さでみられる。遺跡はこの畑の中に位置している。南北と東側を山に囲まれた場所で、風当たりも少なく、比較的暖かな場所である。



第1図 位置図

## 第2節 自然環境

諏訪湖に源を発する天竜川は、伊那の谷を形成し、太平洋に向かっている。この天竜川には東西の山脈から流れ出す中小河川が入っている。それらの河川は扇状地や、台地を形成している。町内における竜東地籍で、最も大きな川が沢川であり、流路は約10kmを計る。沢川の押し出しによって形成されたのが長岡区が位置する扇状地である。

ここは土地が肥沃で地深なため根菜類の栽培に適し、長い間続けられている。沢川は天竜川合流点より約3km上流で二つに分かれ、左手にはいると日向地区と呼ばれ、有賀峠を越えて諏訪に通じている。右手にはいる方面は日影地区と呼び、松尾峠を越えて高遠に通じている。

また、長岡新田の一帯は石灰岩地帯で、日影入り地籍から掘り出された石灰岩を用いて、石灰が焼かれた歴史がある。過去には、この谷から水晶・マンガン等の鉱物の採取も行われた。

遺跡の位置する一之沢地籍は三方を山に囲まれ、風当たりの少ない良い場所である。やや北西に傾斜を成し、水田と畑が広がっている。



第2図 遺跡周辺の地形

### 第3節 歴史的環境

天竜川左岸段丘上一帯は、竜東地区と呼ばれ、ここには長岡区・南小河内区及び北小河内区が東部の一単位として位置している。地形は、天竜川沿岸水田地帯から小段丘や扇状地を経て伊那丘陵に連なっている。主な道路は伊那・辰野停車場線が天竜川に並行して走り、この間に県道南小河内・伊那松島停車場線がある。

この地域一帯の歴史的環境は、先史より近世に至るまで、密度の高い内容を示しており、大きな特徴は、いわゆる「長岡古墳群」と、「上の平城址」が存在していることである。

古墳は長岡の台地上ほぼ全域に分布し、その数は30基前後に上ったと伝えられている。しかし、現在は10基程度確認できるのみである。現状では段丘上突端に位置する羽場の森古墳が最も形状の整ったもので、三基が連なっている。また、残存する石室の状況から推測したとき、角畠古墳は、石室を形成する自然石は2～3トンの大きさを有し、天井石の架構状況も一部残り、円墳としては竜東地区においては最大級のものであったと思われる。

長岡を中心とした竜東地区に大きな力を持った首長の存在を物語るものである。また、同地区内には縄文時代の遺跡も非常に豊富で角道遺跡等遺物の出土も多い。また、昭和61年度に調査を実施した源波第II地点においては、縄文時代早期押型文土器の検出があり、数千年の昔よりこの地が人々の生活の舞台であったことを物語っている。

次に沢川を隔てた南小河内地籍には、前述した上の平城址が位置している。上の平に城を構えたのは伊那源氏の祖といわれる源為公で、その時代は11世紀後半と考えられている。為公は上の平を中心に勢力を広げ、南信における一大勢力となった。城の存在した舌状台地は、南北の見通しも良く、築城地形としては非常に適した自然条件を整えていたといえる。

この地はまた、先土器時代からの遺物も検出され、柳葉形尖頭器等、町内では最も古い遺物の一つが確認されている。縄文時代に入ってからの遺物も豊富で、特に石器の検出数が多い。このように上の平は先史よりの歴史に最も興味深い場所である。

また、近年箕輪ダム建設による長岡新田地区の埋蔵文化財発掘調査において、出土した遺物は非常に古く、新田の歴史を一気に数千年の後方に引き上げたのである。そしてダム建設と共に継続されるであろう発掘調査によって、新たな遺跡、遺物の発見が予測される。



- 一之沢 ②落合 A ③落合 B ④末広 ⑤黒尾尾
- ⑥源波古墳 ⑦角畑古墳 ⑧角道 ⑨荒城 ⑩高向
- ⑪羽場の森1号墳 ⑫羽場の森2号墳 ⑬羽場の森3号墳 ⑭上の平 ⑮日向
- ⑯大垣外 ⑰敷屋敷 ⑱中道 ⑲堂地 ⑳大墓古墳
- ㉑本城 ㉒中山 ㉓藤塚 ㉔上の林 ㉕北城
- ㉖箕輪 ㉗御射山 ㉘澄心寺下 ㉙田畑 ㉚おじょう様古墳

第3図 周辺遺跡分布図

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査の契機

長岡新田跡に箕輪ダム建設事業が進むのに伴い、埋蔵文化財調査が進められた。昭和59年夏、遺跡の存在を調べるために確認調査が実施されたのを初めとして、以後毎年のように遺跡発掘調査が計画、実施されてきた。その都度、縄文時代や平安時代の生活跡が検出され、長岡新田の谷の歴史を新しくして來たのであった。

昭和62年に入り、ダムに使用する岩石の不用土石を捨てる場所が新しく必要という段階に至り、一之沢地籍がその予定地となった。一之沢地籍は、周知の遺跡として登録されていたため、埋没前に発掘調査を実施し、記録保存の必要があるため、今回の調査の運びとなったのである。

### 第2節 調査の概要

- 遺跡名 一之沢遺跡
- 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪1847番地他
- 発掘期間 昭和62年9月22日～10月25日
- 調査委託者 伊那建設事務所長 伊沢 修
- 調査受託者 箕輪町教育委員会
- 調査団の構成は下記の通りである。

#### 調査団

- 団長 橋口彦雄 箕輪町教育委員会教育長
- 担当者 柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員
- 調査員 石川 寛 箕輪町郷土博物館学芸員
- " 竹入洋子

#### 発掘調査団員

- 荒川織光 井上 清 井上武雄 浦野 弘 岡 正 金子 庄 唐沢光国 小池久人
- 小島久雄 小平和子 後藤又市 小林信義 小林光治 小松敬一郎 小松かほる
- 白鳥博臣 根橋とし子 野村金吉 藤森秀男 松田幸雄 山内志賀子 山岸 工

調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

樋口彦雄	箕輪町教育委員会教育長
上島富作夫	# 社会教育課長
太田文陳	# 社会教育係長
柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館主任学芸員
石川 寛	# 学芸員
赤沼悦子	# 臨時職員

### 第3節 発掘調査日誌

○9月22日（火）晴

堂地遺跡の作業機材テントを撤収し、一之沢遺跡へ移動。午前中作業者2名にてテント設置地点の草を刈り、午後からテントの設営を行う。ブルドーザーにて発掘予定地の排土をする。



○9月24日（木）曇り

ブルドーザーで排土作業をしたあと全員でグリッド設定の作業を行う。箕輪ダム建設事務所長古田貞治氏を迎えて、樋口教育長による神事を取り行い結団式をする。グリッドの発掘数も30を越える。N-14に住居址が現れ、土器片も出る。

○9月26日（土）曇り時々雨

昨日の雨で、現場はだいぶ水を含んだ土になっている。遺構を覆ったシートの水溜りを排水してから発掘調査に入った。L-12より口縁部が縱に半分欠けた灰釉陶器製の美しい小壺が現れる。天候が悪いので作業は午前中で打ち切る。



○9月27日（日）晴

グリッドL～0、11～14にわたる住居址を平安1号住居址とする。P-13より山形の押型繩文土器片、1号住居址より灰釉陶器片等が出土する。



○9月28日（月）曇り

始業時からグリッド掘り作業、広範囲のグリッド掘りをしているが明確な遺構等は見つからない。

○9月30日（水）曇り後雨

ブルドーザーで東側の排土をしグリッド設定。又、西側も排土、整地の後グリッドを設定する。

○10月1日（木）曇り後雨

グリッド掘り作業、台風16号及び18号の影響からか、今週に入って天候が不順で発掘作業もままならず、今日も時折小雨がパラつき、午後にはさ



らに雨足が強くなりそうな気配なので午後の作業を中止する。柱穴より鉄製品が出土する。土塙2・3を確認する。

○10月2日（金）快晴

グリッド掘り作業。グリッドF～K、17～22の区域に倉庫の跡と思われる柱穴が確認される。H～22に配石が出土。灰釉の皿片、土師器の坏片出土。配石の平面及び地層断面測量の後、半カットする。J～K、17～18の区域に2号住居址、土塙4確認。黒曜石製石匙出土。土塙1・3地層断面測量。

○10月3日（土）晴

配石土塙墓内より土師器2個体及びI-25グリッドより段皿半欠品が出土。土塙2・4地層断面測量及び写真撮影。土塙5半カット。倉庫跡を確認する。

○10月7日（水）晴

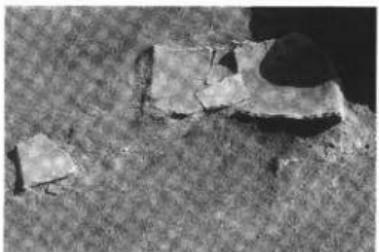
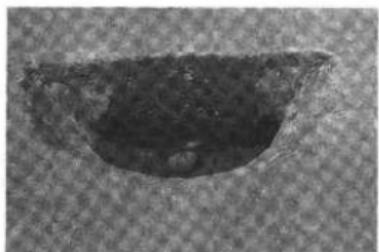
今日から作業班の再編成を行ない、作業も班単位で行うようにする。1号住居址内に坏、深鉢、高台付塊が出土。2号住居址内排土完了。ほぼ中央に約50cmのやや丸味を帯びた穴あり。2号住居址、土塙1～4、掘立建造物址、配石土塙墓等の測量を行う。

○10月8日（木）晴

1号住居址内の排土作業を行う。握り拳大のものから鶏卵大の鉄滓3個が出土する。カマドは2ヶ所あり。床面は最初に出た位置からずれて、さらに低い床面も現れて判断がまだつかない。土塙、掘立建造物址の測量を行う。柱穴より古銭出土。

○10月9日（金）晴

G～F、26～30に3号住居址を確認し、ベルトを設置する。土塙5（袋状ピット）測量。土塙9より鉄製品出土。掘立建造物柱穴群の周囲に土塙があるのでその隣接グリッドも拡大して発掘する



ことにした。

○10月12日（月）雨後晴

3号住居址の発掘を行う。鉄鋤1点、灰釉陶器3点が出土。1号住居址からは段皿完形、半欠品の2個が出土

○10月13日（火）晴

D-24グリッド内から羽状縄文土器の個体と思われるもの出土。復元可能ならば希少価値があると思われる。1号住居址カマドより碗の完形品2個、刀子1本、土器片などが出土する。

○10月14日（水）晴

4号住居址が確認される。5号住居址も確認されたので作業が伸びそうだ。土塹11内より大型の石斧が出る。箕輪ダムの定礎式が行われる。ここ一之沢も土捨場となり、まわりがどんどん埋められていく。

○10月15日（木）曇り

3号住居址の排土作業と写真撮影。5・6号住居址は重なっていそうである。北側に柱穴跡が3ヶ所出る。1号住居址平面測量及び地層断面測量。土塹18の平面及び地層断面測量をする。

○10月16日（金）曇り

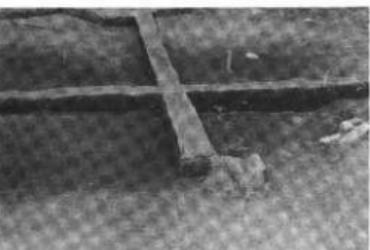
台風19号の接近で風が強くなるとの予報なので、まずテントの補強作業を行う。柱穴部へも浸水防止のシートを張る。3号住居址内の排土作業と5・6号住居址のベルトを外す作業をする。縄文、灰釉陶器片数点出土。

○10月19日（月）曇り時々雨

作業を始めたが、10時すぎには雨が降り出し、今日の作業を中止とする。

○10月20日（火）曇り

1号住居址内に住居址がもう1つあるのが確認され、7号住居址とし、写真撮影をする。平根鐵



1個出土す。3号住居址内の精査をして写真撮影後ベルトを外す作業に入る。5・6号住居址が確認できた。完掘された造構の全ての測量を3組編成で行う。7号住居址は1号住居址をひとまわり小さくした方形である。

○10月21日（水）晴

5・6号住居址の排土作業を行う。土塀25~31まで半カットするも遺物なし。土塁群の全面測量をする。



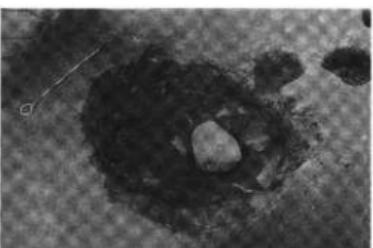
○10月22日（木）

土塁、住居址等の測量が大詰めで忙しい。4号住居址にカマド及びカマドらしき石置場があり、2棟あるのではと思い調査するも確証なく1棟と確認し、ベルトを外す。住居址北西側に等間隔110cmで4ヶ所の柱穴が出る。左右を削って調べたが対称穴がみつからない。4号住居址より土師器の塊、高台付の器の底部のみ5点、及び土器片10点程と灰釉陶器の壺の完形品1個が出土する。



○10月23日（金）

始業時より全員4号住居址へ入り、床面の精査を行う。土塁の完掘と平面測量を行う。2号住居址、5・6号住居址、柱穴及びその周辺の全体写真撮影。7号住居址内より灰釉陶器の壺の完形品や大型の碗の半欠品等を含む土器が出土する。グリッド棒、シートなどを乾燥させて収納する。



○10月25日（日）

4号住居址発掘終わる。本調査で住居址7軒が出土。

## 第III章 発掘調査の結果

### 第1節 調査結果の概要

一之沢地蔵は三方を山に囲まれ、暖かな場所である。また、長岡地蔵の入り口にあたり、長岡区に近い位置のため、水田や、畑の耕作者はほとんど長岡区の人々である。一帯は水田と畑が約2ヘクタールほど広がり、山懐の隠れ里という感じである。この地蔵は以前から「一之沢遺跡」として知られ、耕作者によって遺物が収集されていた。一帯が箕輪ダム建設工事に伴う土捨て場になることから、埋蔵文化財の発掘調査実施の計画となったのである。

昭和62年度春に3回ほどの踏査を行い、調査地を決定する。9月下旬になり調査を開始、10月末には終了の運びとなった。

遺跡地は北に面して暖傾斜をなし、休耕地になっていたため、約2mに達する雑草に覆われている。ブルトーザーによって、雑草と表土の掛け土を実施する。その面積、約20アール余、縄文土器の小片などが少量検出された。調査区東北よりの角からグリッド掘りに着手した。東寄りのやや高い位置に縄文時代の遺物を伴う土塚が4ヶ所検出された。その位置のやや北寄りにカマドと考えられる石組みが2ヶ所発見される。調査の進行につれ、住居址となる。この場所は住居址が重なりあっており、そのため、カマドが2ヶ所見られたのである。住居址は計5ヶ所発見され、いずれも平安時代後半の10世紀から11世紀にかけての時期である。カマドの位置はそれぞれ一定していないが、芯に平石を立て、その周囲をローム等で固めている。

また遺跡のほぼ中央部に柱穴址が集中し、複数の掘立建造物址が位置している。また、20余の土塚も建造物址と同位置にある。また、注目されるのは、配石土塚墓と考えられるものが一ヶ所確認されたことである。列状に並んだ石の中に土師器及び灰釉陶器を置き、其の下に径1m余の円形に振り込まれている。底面はほぼ平らで、ある程度の整地をし、枕木の平石を一個置いている。横になって手足を折り曲げると、平石を枕にして寝ることができます。土塚墓と考えてよい遺構である。

平安時代後半を中心とした遺構は、長岡新田で調査を実施した末広・落合等とほぼ同時代のものである。長岡新田の谷に入った人々はいずれも同じ時期であったと考えられる。

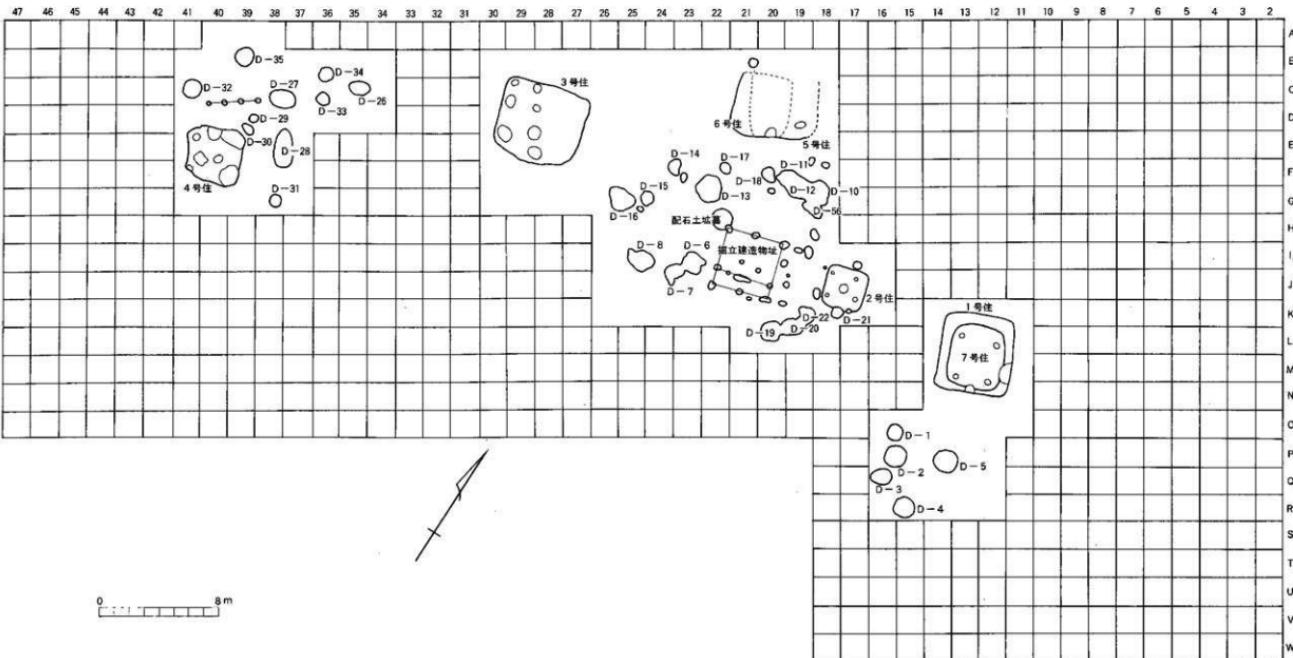
## 第2節 遺構

### 1. 遺跡周辺の状況

箕輪町の地形は、南流する天竜川によって東西に二分され、天竜川東地域を竜東地区と呼んでいる。本流に注ぐ中小河川においては、沢川が最も大きな川であり、川の両岸に遺跡が点在している。本遺跡は沢川の下流地域に入り、長岡区の人々によって耕作されている畑地と一部水田が見られる。この一之沢地籍は南北と東側を山に囲まれているため、風当たりも少なく、比較的暖かな場所である。こここの場所と同様な地形が、三日町澄心寺下遺跡にも見られ、ここも北風が当たらないため、暖かな場所と言われている。遺跡地南側を長岡新田に通じる道路があり、旧道と呼ばれ、古くはこの道が開けられたため、農道、林道としての使用が主であった。箕輪ダム建設に伴い、遺跡地東側の山がダムに用いる原石の供給地となった。この原石山から出る不良岩石の土捨場が、本遺跡の存在する一之沢地区となったのである。一帯は発掘調査が終了すれば、大量の土砂に埋まり、地形は一変してしまうのである。

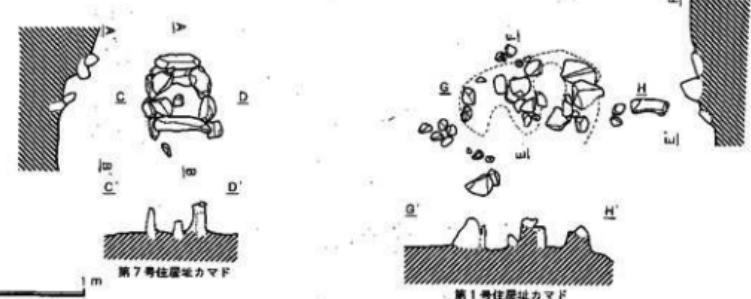
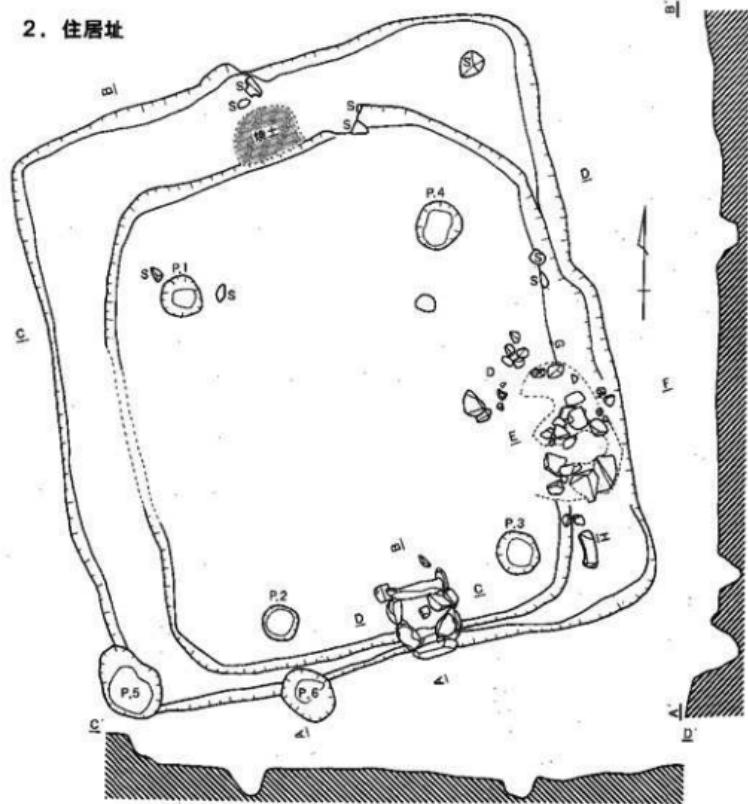


調査地を見る



第4図 掘査区全測図

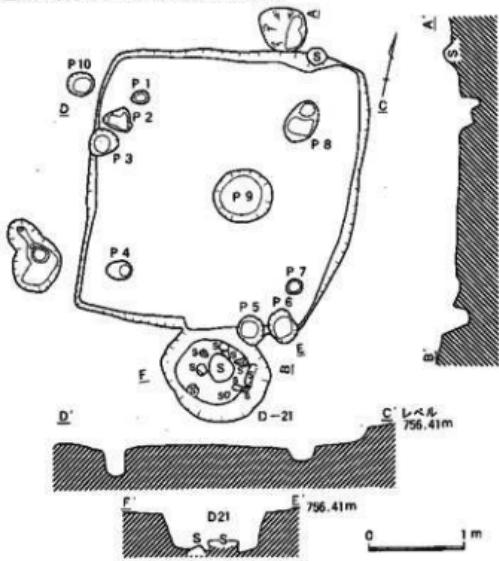
2. 住居址



第5図 第1・7号住居址実測図

### 1) 第1号住居址（第5図）

本住居址は、発掘調査区東寄りの中央部に位置している。東端よりグリッドを市松状に掘り下げて、遺構確認を進めている段階で、最初に検出されたものであった。住居址の形状としては隅丸方形で、南北5.6m、東西5mを計る。実測図に見るごとく、第1号住居址のプランの中に入って第7号住居址が確認されている。そのため、第1号住居址の内部施設等は、破壊されているものが多い。住居址の床面として確認できる部分は外周の壁寄りの一部で、北壁前が顕著である。この北壁中央部に小さな石が2個と、焼土がわずかに検出された。この焼土は後で造られた第7号住居の北壁で切られており、約半分が残っている。このカマド跡の東側床面に灰軸の段皿などが完形で数点検出されている。東壁中央やや南寄りに、集石のカマドと考えられる施設が見られる。これは、第1号住居址に伴うもので、北壁に造られたカマドを東壁に移転したものと考える。そして後で造られた東壁のカマドも第7号住居址によって前部を切り取られている。このカマド内からは鉄滓が3個と鐵錆が見られた。カマドは芯石になるようなものは見られず、中ぐらいの石を数多く用いて形成している。本住居址に伴うと見られる主柱穴は確認することができなかったが、これも後で造られた第7号住居址築造によって床面下が掘られたためであろう。南壁中に見られるP5、P6は補助柱穴のものと思われる。住居址全体に落ち込み状況も少なく、はっきりしないプランである。北東隅の床面から検出された灰釉陶器から本住居址は11世紀代の時期と考えられる。



第6図 第2号住居址・第21号土塙実測図

## 2) 第7号住居址（第5図）

本住居址は、第1号住居址の文中において示したように、住居址の中に完全に入った形で検出された。第1号住居址の床面を掘り回めて築造されたものであり、壁高も少なく、落ち込み範囲の確認は困難な部分が見られた。住居址はやや小さ目であり、隅丸方形を呈している。プランは南北4.6m、東西は3.7mを計る。カマドは南壁中央やや東寄りに位置しており、その軸線は竪穴の軸線をやや方向がずれているが、形がほとんどくずれておらず、遺存状況の良好なカマドである。両袖の中心には、平らな細長い石を3個づつ立てて芯石にしている石芯カマドである。周囲をローム等で固め、天井部を細長い石で架橋状態にしており、火床部には支脚が残り、カマドの全様を見ることができる。火床部は若干掘り回められており、焼土の埋積が認められる。袖部の石芯及び支脚は、いずれもカマドの基部を掘り込んで固定されている。4本の主柱穴は、四角に等間隔に配置され、深さは20~30cmと比較的浅く、柱穴底部も一定した形状にはなっていない。壁の立ち上がりはゆるい傾斜で、壁高は少ない。床面は、カマド前面の周辺はかなりの堅さを有しているが、他は軟弱な部分が多く、良好な床面ではない。遺物はカマド前面の床面に貼り付くように土師器甕の大形破片がまとまって出土している。住居址は第1号住居址の中にすっぽりと入った形になっており、前住居址の凹地を利用して掘ったのであろうか、出土遺物を見ても、ほとんど時期的な相違は認められない。

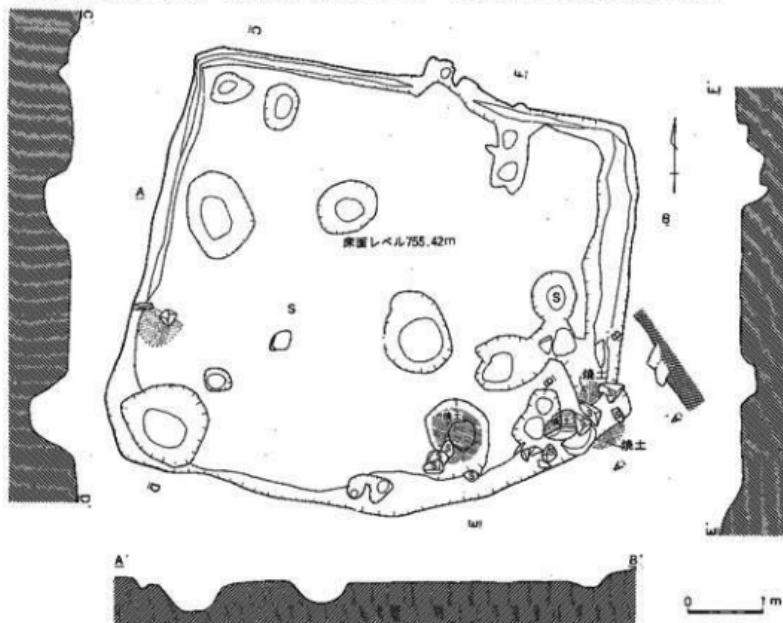
## 3) 第2号住居址・第21号土塙（第6図）

第1号住居の北西寄りに位置して検出された住居址である。一辺3m弱の方形を呈し、きわめて小さな住居址である。壁高も10~15cmで、床面も一部分を除いては軟弱であり、長期間使用した住居ではない。内部施設としては主柱穴が見られるだけで、カマドの存在は見られない。また住居址内及び周囲に柱穴と思われるピットが見られる。また南壁に接して土塙21が位置しており、底には石が数個顔を出している。径1m、深さ40cmを示す土塙である。

## 4) 第3号住居址（第7図）

本住居址は、調査区ほぼ中央の平らな部分に位置しており、検出された住居址中では最も規模の大きなものである。形は東西に長い長方形を呈しているが、カマドを設置した南東の角が大きく内側に入り込んだ形になっている。プランは、東西6.5m、南北5.9mを計り、床面は755.42mの標高を示している。住居址内の施設としては、まずカマドが見られるが、本住居址は最初のカマドを西壁中央やや南寄りに築いたが、何かの都合で南東の角に移したものと考えられる。西壁には火床部の焼土と、袖石の一部が残り、カマドの残存状況を見ることができる。後で築いたカマドは、河原石をかなり多数用いている。袖部や芯石等かなり移動し、構築時の状態を見ることはできないが、大型のカマドを推定させる。住居址内には幅広い周溝が廻って

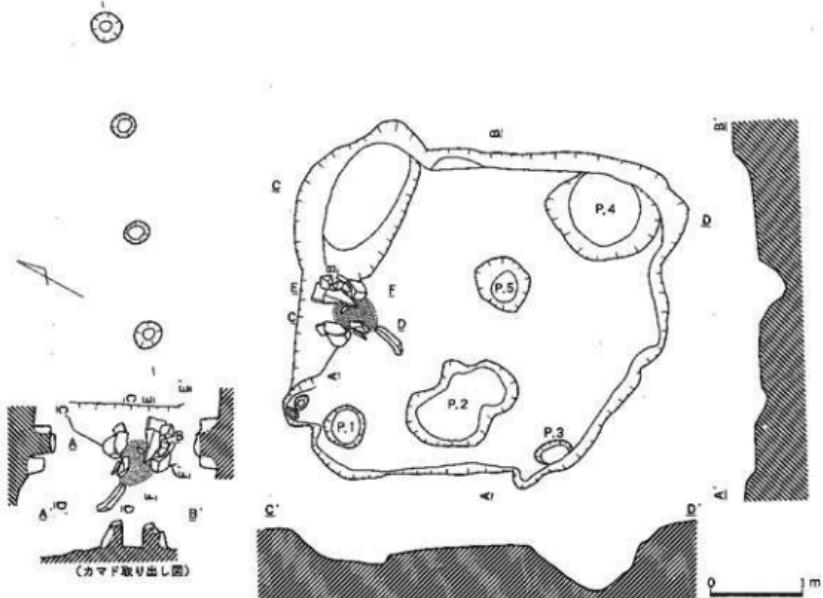
いる。住居址内には大小のビットが存在するが、主柱穴と決められるものが少なく、発見に務めたが、はっきりしなかった。床面はほぼ平らで、一部分を除いて良好な状況である。



第7図 第3号住居址実測図

##### 5) 第4号住居址（第8図）

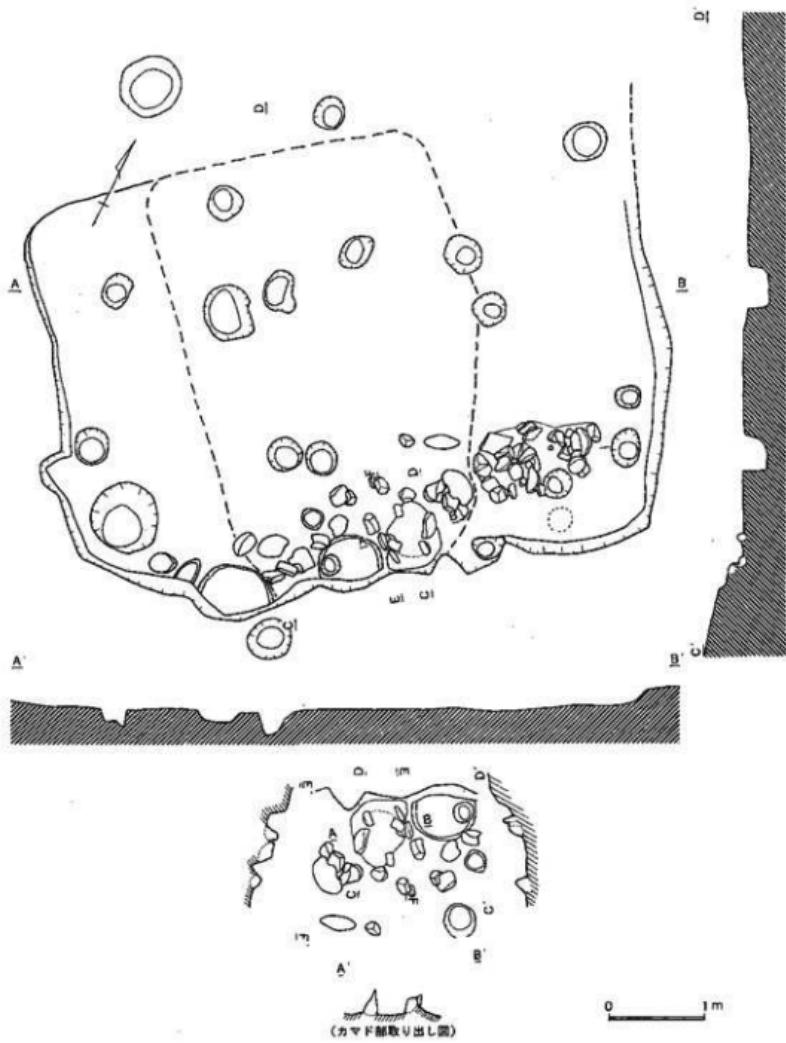
本住居址は調査区の西端に位置している。東側調査区に比べ、土層状況が全体に軟弱で、水分を多く含んだ土である。水田や小さな川に近いことも考えられるが、一之沢のはば中央にあたり、やや低い場所ということから、水分の多い土質なのであろう。住居址は南北に長いプランを呈しているが、土質が軟弱で、落ち込み状況がはっきりせず、住居址の形状は不安定である。カマドは北壁中央に位置し、カマドの軸線は竪穴住居の軸線とほぼ同一である。天井部や袖の一部分は構築時の形状を留めてはいないが、全体には比較的良好な遺存状態であった。袖部には芯に河原石を用いており、片側に5~6個の偏平な石を立てている。火床部には焼土の堆積がかなり多く見られる。床面は凹凸がはげしく、大きなビットも見られる。遺物はカマド周辺に集中し、灰軸環、土師器環等、出土遺物は比較的多い。また住居址北側に1.2m間隔で4個のビット列が発見されたため、周辺調査を実施したが、どのような性格のビット列か、決めることはできなかった。



第8図 第4号住居址実測図

#### 6) 第5.6号住居址（第9図）

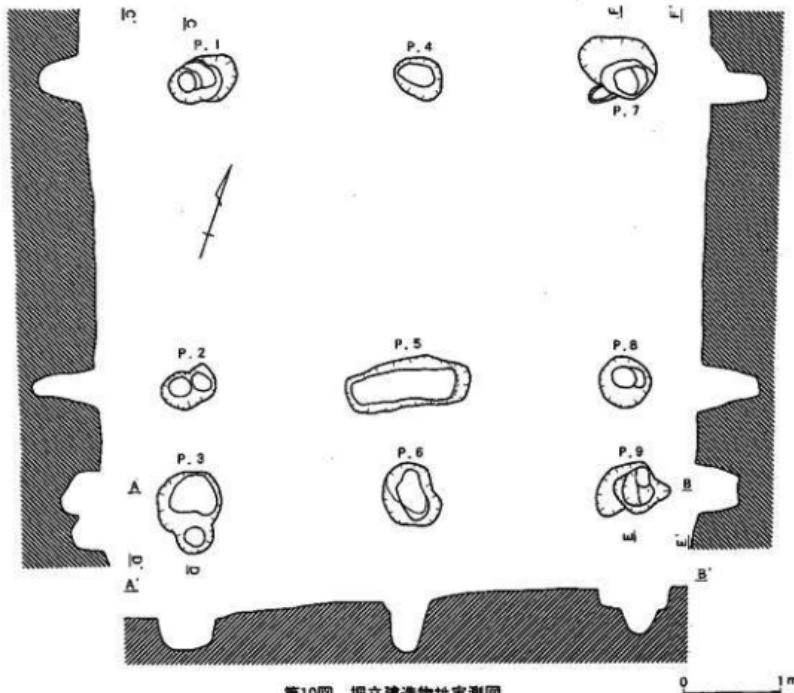
本遺構は、調査区中央の土塹群北側に位置している。遺跡地は南東側がやや高い傾斜地であるため、住居址はカマド側の壁が高く、北側は壁高が不明の状況である。住居址は南東の部分から落ち込みが確認され、統いてカマドを構成する礫群の発見があり、住居址として調査を進めた。南壁の調査を進めるにつれ、礫群が二つのグループに分かれる様相を呈しており、引き続いて調査を進める段階でカマドが二つ並んで検出された。そのため二つのカマドの関係を重点的に調査を進めた。カマドは南壁に向かってほぼ並ぶ形で検出されており、いずれも袖の中に平らな石を立てて構築している。いわゆる石芯カマドである。住居の切り合いや重なり状況なども注意をしながら考えたが、東寄りのカマドを有した住居址が先に造られ、径約5m程度のプランを有したものと推定する。これを第5号住居址とする。カマドは南壁中央やや東寄りに造られ、多数の石を用いて構築されている。袖の芯には平石を立てて芯石としており、他の住居址と同様な方法による。5号住居址のカマドに接するように並ぶカマドの住居址を6号住居址とする。6号住居址は東南の角にカマドを構築している。一辺3.5m程度のやや小さなプランと推定される。床面は同一レベルであり、遺物の時期にもほとんど差は見られない。



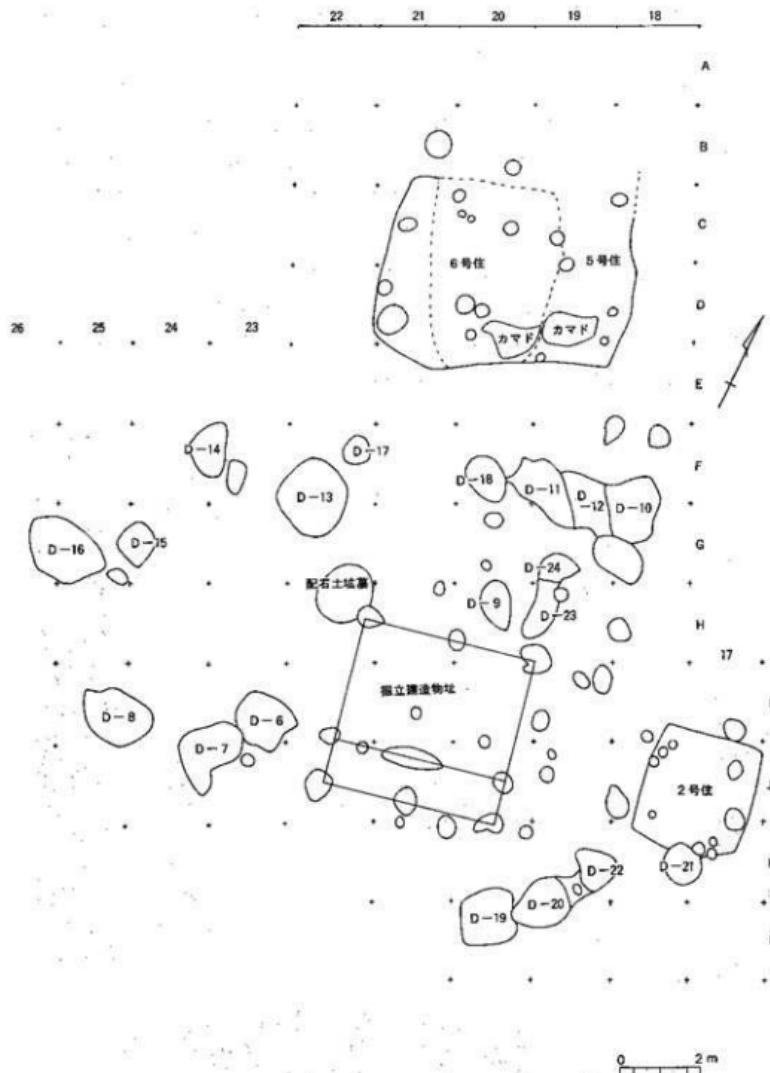
第9図 第5・6号住居址実測図

### 3. 掘立建造物址（第10図）

調査区中央の土壇の中に位置しており、地形は南北に緩やかな傾斜を呈している。周囲にも同様なピットが数多く見られるが、規則性を有して掘立建造物址と決めることができたのは、本例一ヶ所のみであった。調査の進行状況が進むにつれ、ピットの規則性が確認された。当初はP.1, P.4, P.7の1列とP.2, P.5, P.8の2列から成る建物址と推定されたが、平行してP.3, P.6, P.9の列が付随することが判明した。プランは東西4.6m、南北3.2mが柱穴のプランであり、棟と平行して南側に1mの廟を出した形になっている。プランは柱穴の芯々間の距離を示したが、桁行は当然これより大きくなる。このように棟と平行して廟を出す型はあまり見られないが、町内においては、中央自動車道に伴う中道遺跡でこの型の掘立建造物址が、いくつか見られる。柱穴は上面の大きさが50cm～60cmの円形を呈するものが多く、深さは浅いもので40cm、深いもので60cmを計る。底部が二段になるものもあり、立てた柱の太さを示す場合も考えられる。周囲の住居址に伴う倉庫であろう。



調査区外



第11図 土塙群全測図

#### 4. 土 坡

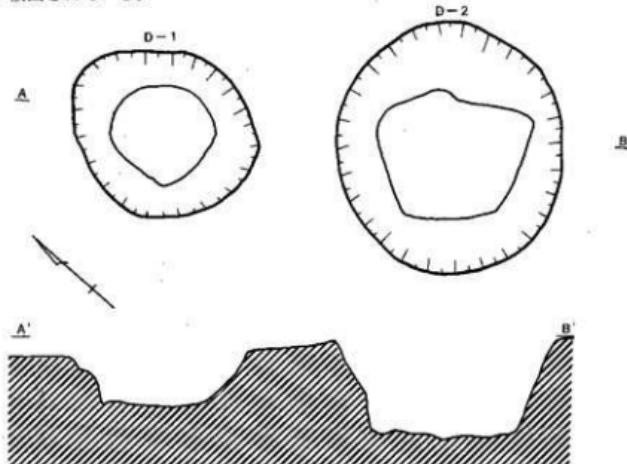
##### イ) 第1・2号土坡 (第12図)

調査区東南寄りに発見された土坡である。土坡の位置する場所は南側が、かなり急な傾斜になる位置であるが、土坡の確認された面は、ほぼ平らな状況で発見されている。1号土坡は長径1.2m、短径1mの橢円形を呈し、深さは32cmを示している。底は平らで、壁面、底面共に調整した痕跡が見られる。2号土坡は径1.5m程度のほぼ円形を呈し、深さは60cmを計る。底部はほぼ平らで、堅さを有し壁も調整してある。縄文時代の貯蔵穴的な土坡と考える。

##### ロ) 第3・4号土坡 (第12図)

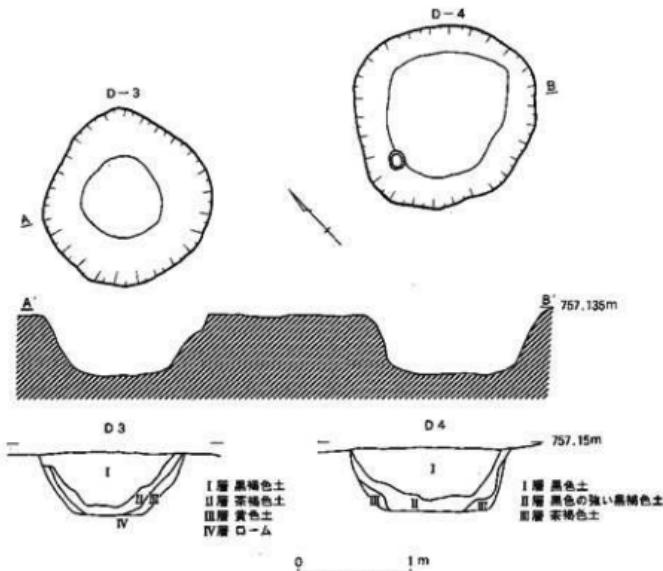
前述の1・2号土坡に並んで発見されており、同時期のものであろう。3号土坡は径1.4mのほぼ円形を呈し、ローム層を掘って形を整えて土坡を構築している。底部はほぼ平らで、壁と共に堅い敲きになっている。深さは54cmを計る。

4号土坡は3号土坡の西側に約1.4m離れて並んでいる。径1.6mほどの円形を呈し、底はほぼ平らで同様に堅く敲いて整えられている。底は約1mの円形を呈し、52cmの深さを示している。覆土は三層よりなり、典型的な土層状況を示している。また覆土I層中に黒曜石のスクリバーが検出されている。



第12図 第1・2号土坡実測図

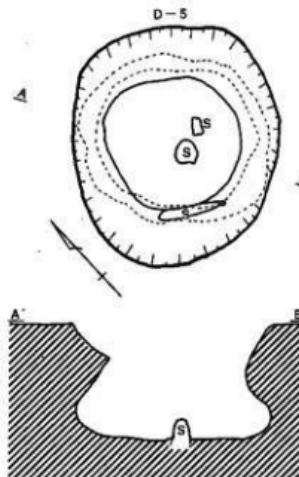




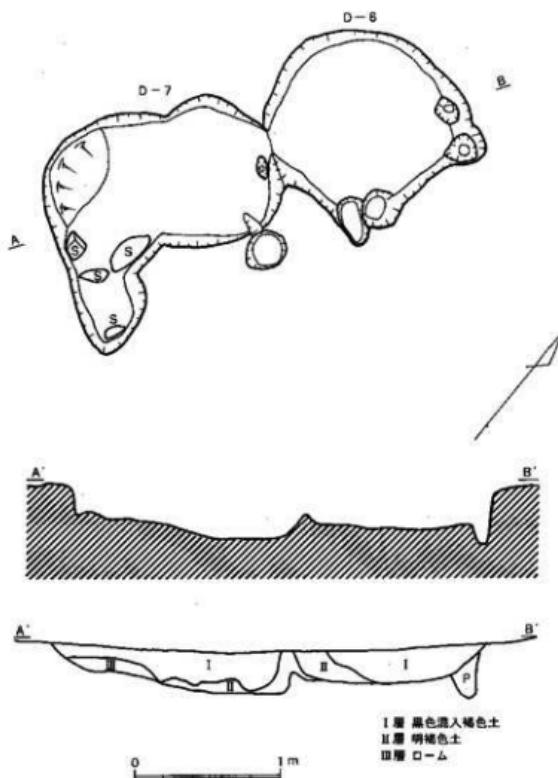
第13図 第3・4号土塙実測図

#### ハ) 第5号土塙(第14図)

1～4号土塙と同様な位置に並ぶ土塙であるが、本土塙は形状に他と異なる特徴を持っている。落ち込み確認面における上部の形状は長径1.5m、短径1.3mの梢円形を呈しており、上面から25cmほど下がった地点から袋状に張り出しが見られる。最も張り出した地点においては、径1.3mを示している。底部は平らになっており、底の中央には石が立つように顔を出している。5個の土塙はいずれも同時期のものと考える。



第14図 第5号土塙実測図



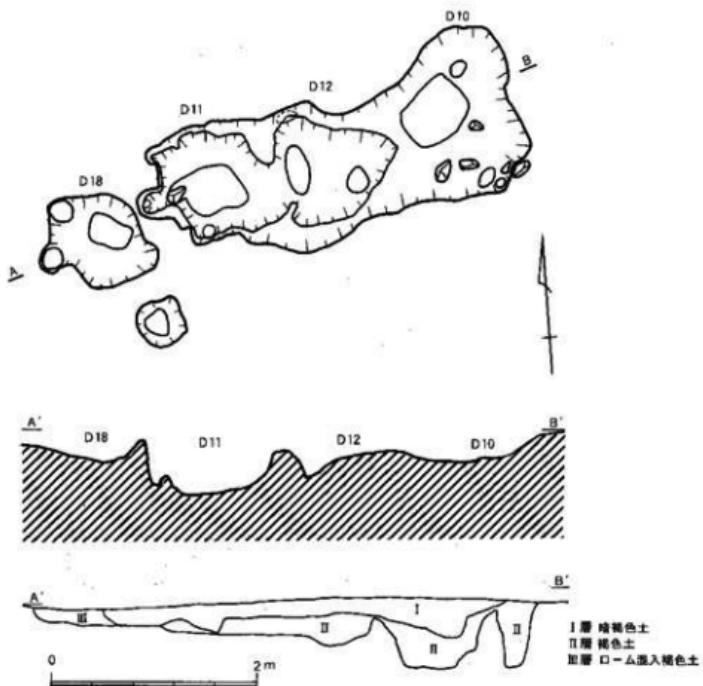
第15図 第6・7号土塙実測図

## 二) 第6、7号土塙 (第15図)

本土塙は、土塙群南西に位置し、2つが切り合った状態で検出された。2つ共に不整規円形を呈し、深さ25cm程度の浅い土塙である。6号土塙の中には柱穴状のピットが入っている。7号土塙内の南寄りには平石が見られるが、後で落ち込んだものであろう。壁面及び底も調整した様子もなく、どのような目的の施設か判断ができない。

## 木) 第10、11、12、18号土塙 (第16図)

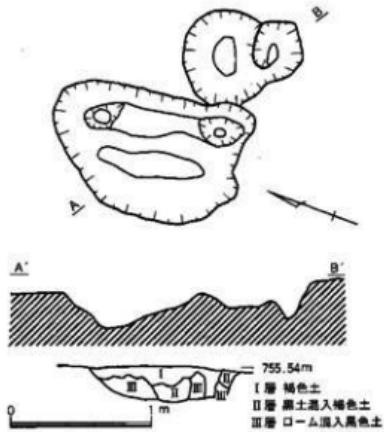
第5、6号住居址の南側に列状に並んで位置している。形状も不定形であり、一つの目的を持って掘られた土塙には見えない。最も深い11号土塙は25cmを計るが、他は15cm前後と浅いものである。出土遺物も見られず、時期的な推定もできない。



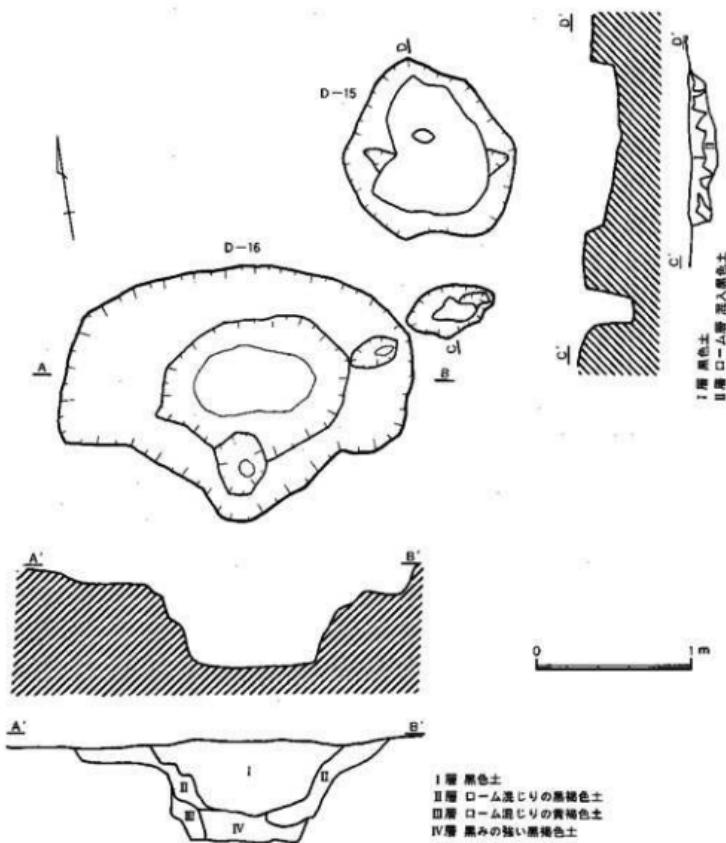
第16図 第10・11・12・18号土塙実測図

へ) 第14号土塙 (第17図)

土塙群北西の角に位置している土塙で、長径1.4m、短径90cmを計る橢円形を呈している。中央の最も深い部分で24cmを示しているが、両端にピット状の小さな落ち込みが二ヶ所見られる。壁や底も調整した様子も無く、特別の意味を持つ土塙とは考えられない。



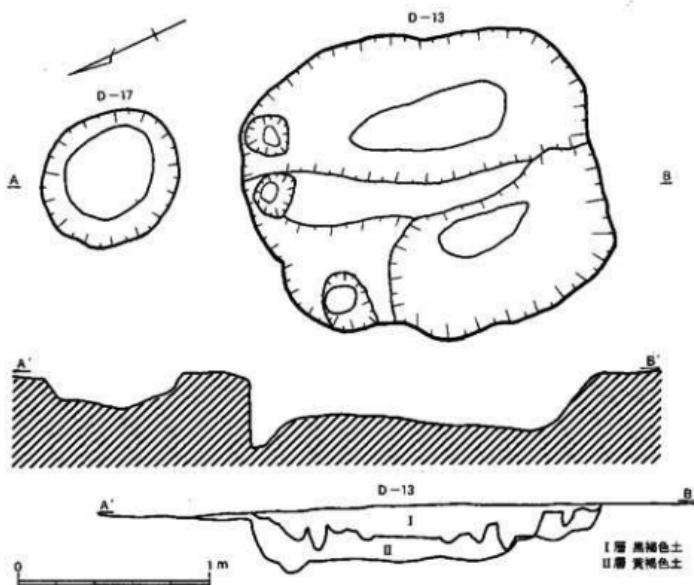
第17図 第14号土塙実測図



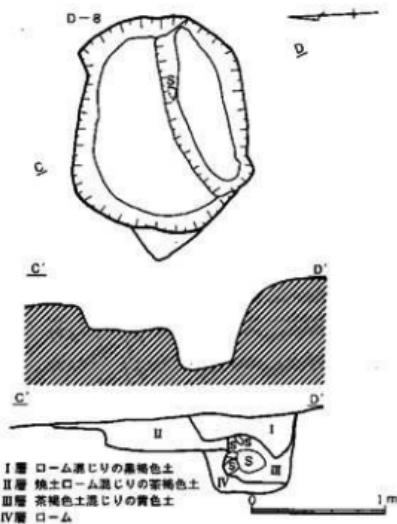
第18図 第15・16号土塙実測図

#### ト) 第15、16号土塙 (第18図)

第3号住居址の東側に位置した土塙である。16号土塙は検出された土塙の中では大型で深さも70cm近くあり、ローム層を振り込んで構築されている。平面プランは東西2.2m、南北最大径1.65mの梢円形を呈し、底は径80cmほどの円形を示し、平らな敲きになっている。この土塙などは、貯蔵穴的な目的のにより構築されたことが推定できる。15号土塙は径1mほどの円形を呈し、深さは20cm余である。底部はほぼ平らでやや敲きの感じが見られる。



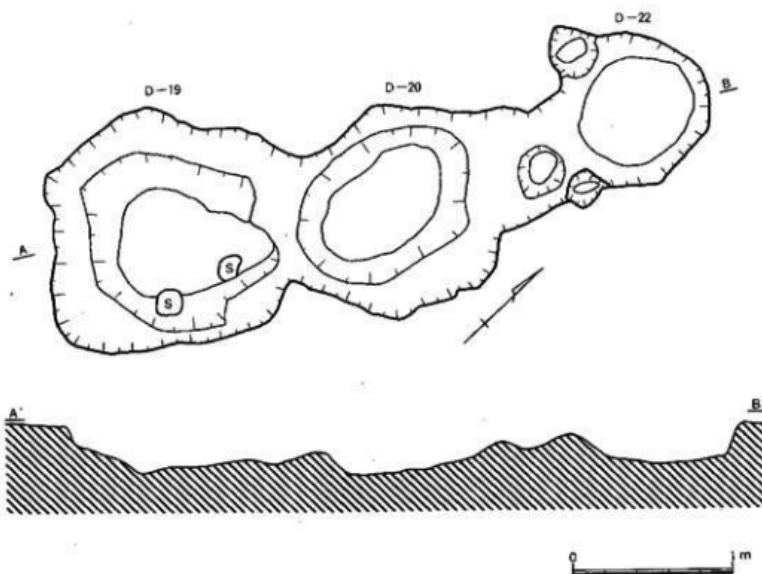
第19図 第13・17号土塚実測図



第20図 第8号土塚実測図

#### チ) 第13、17号土塚 (第19図)

本土塚は、配石土塚墓と並ぶ状態で位置しており、13号土塚は長径1.8m、短径1.6mの楕円形を呈している。底は東西に2つに分かれるように凹んでおり、中央は尾根状を呈している。北寄りには柱穴状のピットが三ヶ所見られる。壁面や底は特別な調整はしておらず、構築目的は不明である。17号土塚は径65cmほどの円形を呈するもので、小型土塚である。二ヶ所共、出土遺物などは見られない。



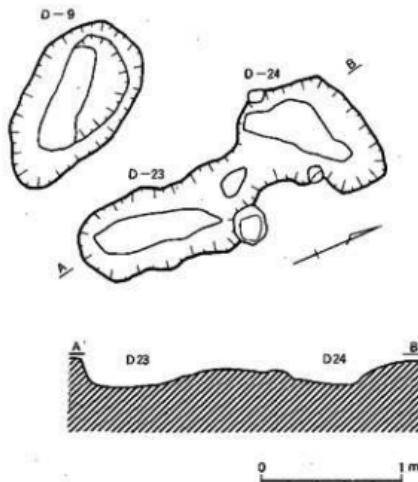
第21図 第19・20・22号土塙実測図

#### リ) 第8号土塙 (第20図)

調査区北西の角に位置している。東西1.6m、南北1.3mのプランで橢円形を呈している。南側の約半分が一段深くなっている。2つの土塙が重なったようにも思える。北側が低い傾斜地であり、南側が24cm、北側が60cmの深さを計る。南側の深い部分が後で掘られたものである。

#### ヌ) 第19、20、22号土塙 (第21図)

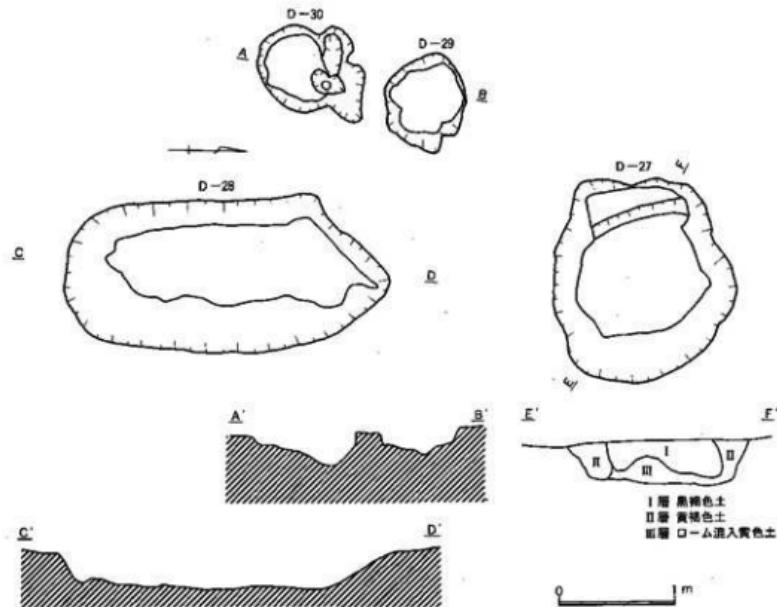
土塙群の西南、第2号住居址の西側に位置している。三ヶ所の土塙が並んで検出されたが、掘り進む段階で、三ヶ所が連なった形になっている。19号土塙は径1.4m程度の不整円形を呈し、二段に掘られている。深さは25cm程度である。20号土塙は径1.2mの不整円形を呈しており、やや南北に長く感じる。深さは最も深いところで30cmを計り、底部は一部敲いて調整しているよう見える。22号土塙は三つ並んだ土塙のうちでは最も整った形をしているもので径90cmのほぼ円形を呈している。深さ26cmを計り、底部はやや丸味を持っており壁面共に多少調整した状況が見られる。南側には三ヶ所の小さなピットがあり柱穴状の落ち込みがある。これらの土塙の性格を決定づける内容は見られないが、土塙群の中にはこの状況のものが多い。



第22図 第9・23・24号土塙実測図

ル) 第9・23・24号土塙(第22図)

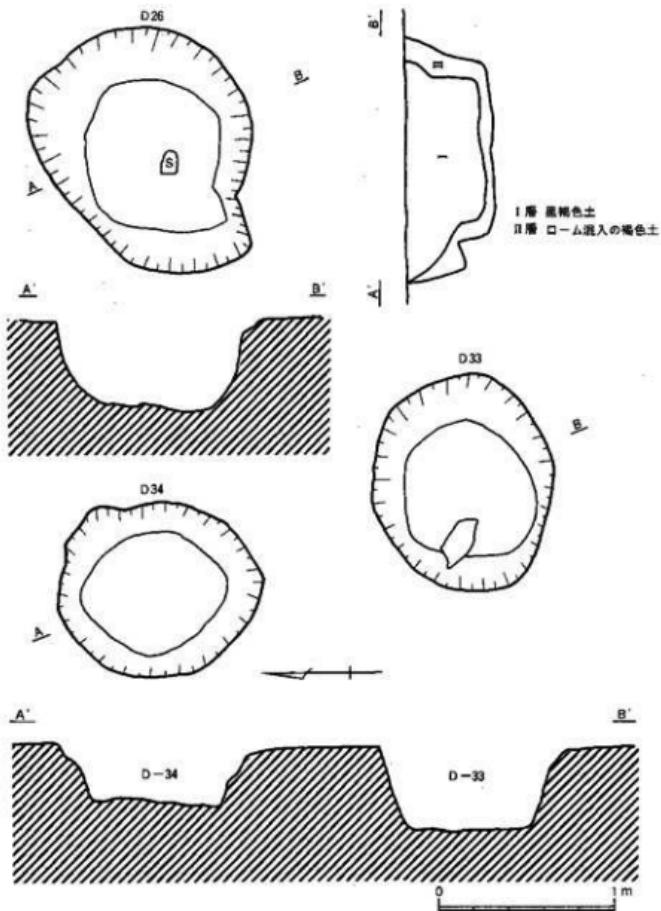
土塙群のほぼ中央に位置しており、同様な土塙をいくつか見ることができる。9号土塙は卵型をしており長径1.3m、短径70cmのプランである。底部は二段になっている。23号土塙は南北に長い形で深さは20cmである。24号土塙は東西に長い不整橿円形を呈し16cmの深さである。壁面も底部も調整の様子は無く使用目的のはつきりしない土塙である。



第23図 第27・28・29・30号土塙実測図

ヲ) 第27. 28. 29. 30号土塙 (第23図)

調査区の最も西寄り、第4号住居址の周囲に位置している土塙である。27号土塙は東西1.7m、南北1.6mの橢円形を呈し、深さは38cmを計る。覆土は三層に分かれている。28号土塙は南北に長い小判型を呈し、南北2.8m、東西1.3mを計る。壁面、底部共に多少整えているように感じられる。落ち込み確認面からの深さは34cmと浅く、使用目的は不明である。出土遺物は無い。29. 30号土塙は小さな落ち込みである。



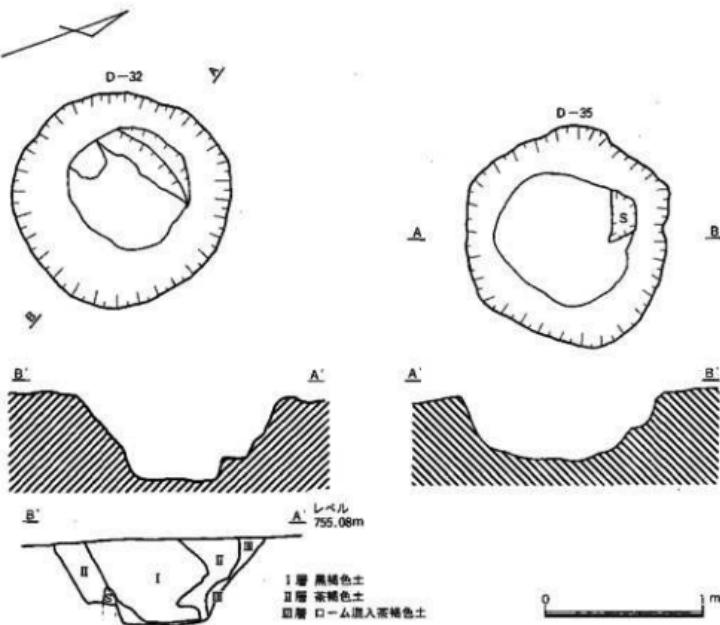
第24図 第26・33・34号土塙実測図

ワ) 第26、33、34号土塙 (第24図)

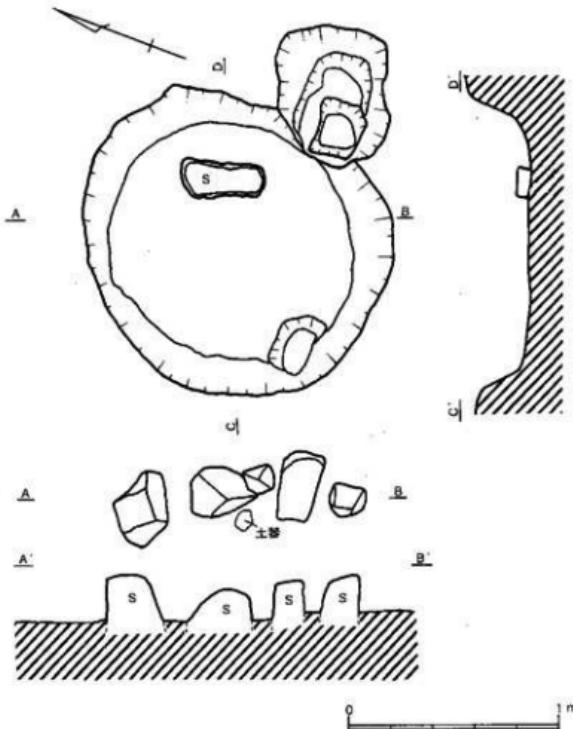
第4号住居址北側に検出された土塙で、形状的には第1号住居址南側に見られた1～5号土塙と同じである。26号土塙は長径1.4m、短径1.1mの楕円形を呈し、深さ48cmを計る。33号土塙は長径1.2m、短径1mの楕円形で深さ46cmである。34号土塙は径ほぼ1mの円形を呈し、底部はやや中央部が高くなっている。深さ32cmを計る。3つの土塙共に同様な形状をしており、貯蔵穴的な使用目的を持つものと推定する。

カ) 第32、35号土塙 (第25図)

第24図に示した土塙と並ぶ状況で検出されたものである。32号土塙は径1.35mの正円形を呈し、52cmの深さを計る。半分が二段に掘られて階段状になっている。壁面、底部共に一部敲いて調整している。覆土は三層に分かれている。35号土塙は径1.4mのほぼ円形を呈し、深さ40cmを計る。26号、32～35号の5ヶ所の土塙は縄文時代の貯蔵を目的としたものと推定される。



第25図 第32・35土塙実測図



第26図 配石土塙墓実測図

## 5. 配石土塙墓（第26図）

土塙群の北西に検出された遺構である。表土を機械で排土し、手掘りの段階で一部石の頭が見られた。20cm前後の石が南北1.2mの間に一列に並び、その間に土師器と灰釉陶器の壺が見られた。この状況から遺物を伴った配石遺構であるとの推測をし、配石下の遺構検出に注意をした。推定のように石の下には径1.45mのほぼ円形の落ち込みが確認された。壁は急な斜壁で底面共に敲いて美しく整えられている。落ち込み確認面からの深さは26cmである。底の中心から東北寄りに平石が置かれている。長径38cm、短径13cm、厚さ7cmほどの平石である。これは死者を埋葬する時の枕石ではなかったかと考えた。調査終了後、この遺構に入り横になってみたが、手足を曲げ、石を枕にすると、具合よく中に入れめた。埋葬施設としての土塙と推定したい。

### 第3節 遺物

#### 1. 繩文時代

##### 1) 土器 (第27図)

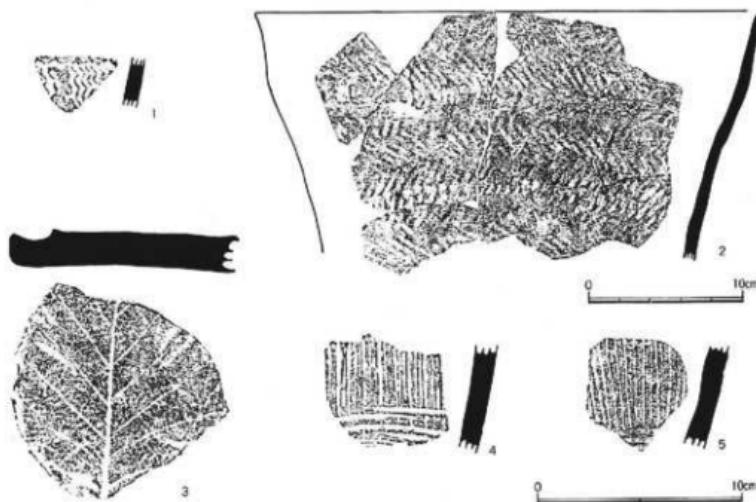
1は、山形押型土器であり、縦・横位の異方向に山形の原体を転がして施文するもので、樋沢式にみられる施文方法の特徴を示すものである。

2は、口縁部が大きく開き、底部は小さくつぼまる形状を呈する深鉢型土器である。外面には無節の羽状縄文を全面に施し、4～5cmおきに横位に連続する刺突が認められ、内面には指頭圧痕と輪積痕が観察され、器厚は薄い。また、外面には煤の付着が、内面には黒褐色ないし茶褐色の炭化物の付着が認められる。これらの特徴から、縄文前期中頃の在地系のものと考えられよう。

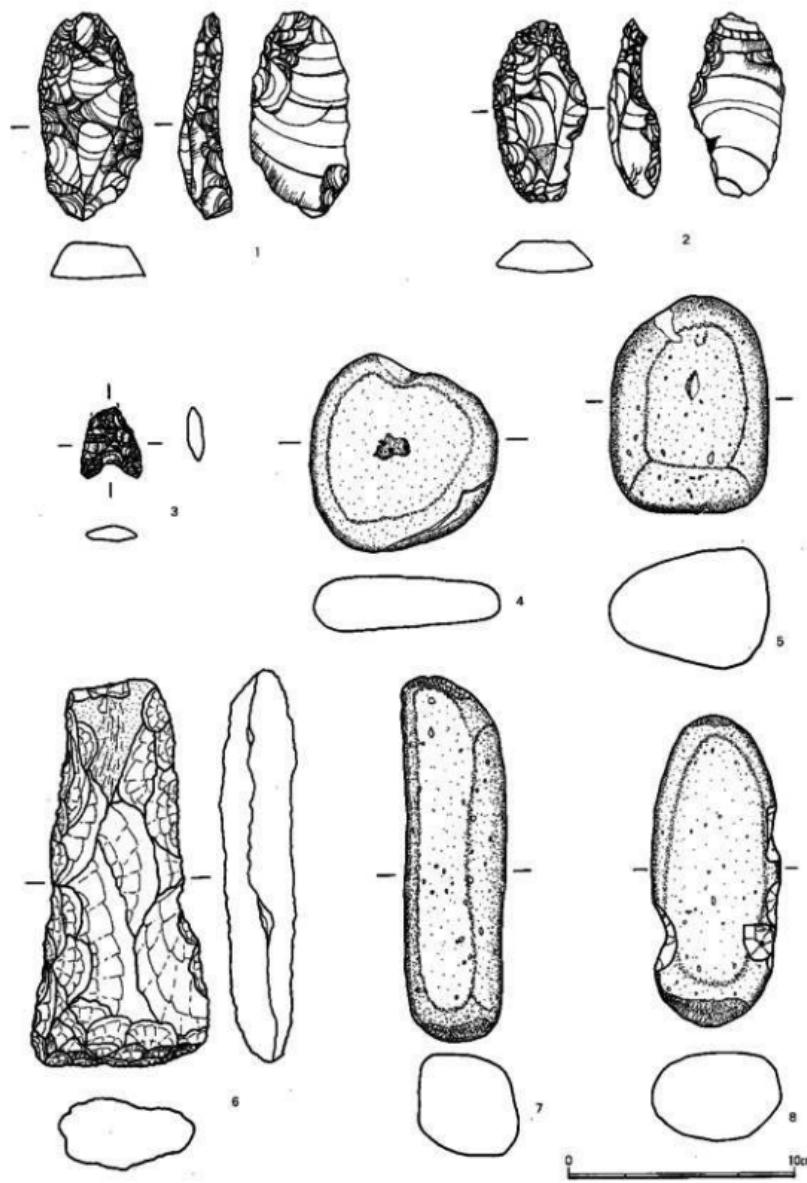
3は、深鉢型土器の底部で、木葉痕が認められる。胴部との輪積みによる接合部からの欠損状態が観察されるが、これのみより本土器の性格や時期は不明である。

4は、半截竹管状工具による沈線文が施されるもので、縦位に施文した後、その端を切るよう横位に施している。これらの文様構成は、縄文中期初頭の梨久保式の特徴を示すもので、キャリバー型を呈する深鉢型土器の口縁部片と思われる。

5は、4と同様の特徴を示すもので、縦位の沈線文と横位に半截竹管状工具による押し引き



第27図 出土縄文土器拓影図



第28図 出土石器実測図

## 2) 石 器 (第28図)

1と2は、縦長状に成形された剥片の左右両側縁部に、丁寧に連続する刃部を演出するスクリーパーである。刃部は、片面調整によるもので、裏面には使用痕と思われる不連続な剥離痕が観察される。1は、4号土塹より出土したもので、また石質は、共に黒曜石である。

3は、黒曜石製の無茎回基石鏃である。基部中央部には、鋭い抉りが入り、両端部は尖らせた作り出しを行っている。また、先端部は欠損している。

4は、偏平な円盤状の転石を用い、その平坦な側面の中央部に傷状の凹部を有するもので、小型の剥片石器を製作するための台石ではないかと考えられる。また、両側面には磨痕が、側縁部の一部には敲打痕が観察され、台石だけでなく、「磨る」「敲く」の多機能を有する兼用石器と思われる。石質は、砂岩である。

5は、砂岩の河原転石を使用する磨石で、全体的にすべすべした感触はあるものの、著しい磨痕は認められない。

6は、橢形に属する大型の打製石斧で、丁寧な成形がなされ、刃部は直刃を呈し、刃部から側面部にかけて激しい使用状況を示す磨痕が観察される。また、両側面中央部には、炭化物の付着が認められる。石質は輝緑岩である。

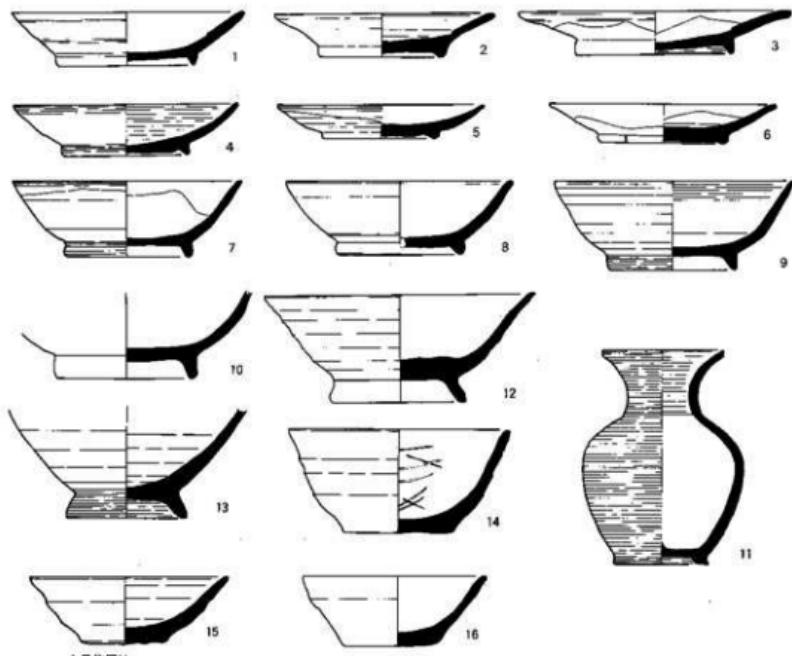
7と8は、縦長の河原転石を使用する敲石である。特に8は、両側縁部に敲打ちによる抉りが入り、使用時における握り部を形成しているのではないかと思われる。石質は、共に砂岩である。

## 2. 平安時代

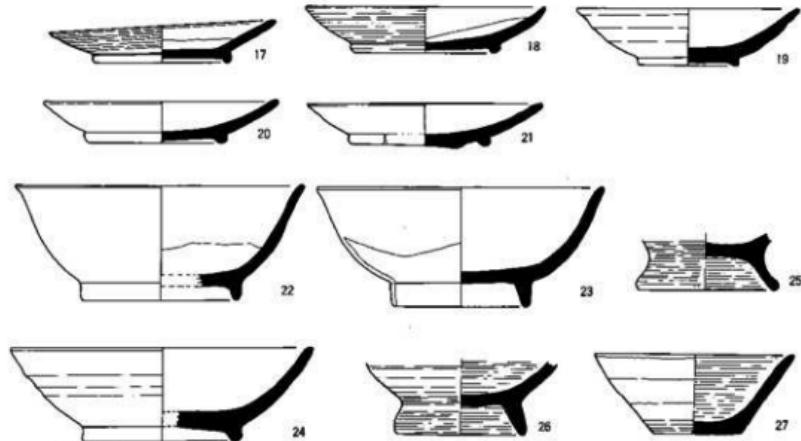
### 1) 土 器

#### 1号住居址出土土器 (第24図 1~16)

灰釉陶器は、皿(1~6)・碗(7~10)・小型長頸壺(11)。土師器は、高台付壺(12~13)・壺(14)・坏(15・16)のそれぞれの器種の出土がみられ、食器類が目立っている。灰釉陶器では皿が、段皿のもの(1~3)とやや内湾ぎみに外反するもの(4~6)とに分けられる。段皿の中でも1は、底部回転ヘラ切りであるのに対し、2は回転糸切りによるものである。また3は、底部回転ヘラ切りであるのは1に共通するが、径が大きく、口縁部がほぼ水平状に開く比較的浅いものである。4~6は、すべて底部回転糸切りによるもので、特に4と5は、底部の切り離し部からやや体部にかかるところに高台を取り付けており、底部と高台の間に溝を形成している。碗は、すべて底部回転糸切りの後高台を取り付けるもので、浅く容量の少ないもの(7・8)と、深く容量の多いもの(9・10)とに分けられる。11の小型長頸壺は、胴部は球状近くふくらんで肩が張り、口縁部はラッパ状に外反する。ロクロ成形により、口縁部と



1号住居址



4号住居址

第29圖 出土土器実測図 1

0 10cm

胴部が別々に作出された後に取り付けがされ、胴部外面はヘラケズリにより器面が整えられて、口唇部は面取りされる。底部も回転糸切りの後高台が取り付けられている。

土師器の高台付の塊は、体部はあまり内湾せずほどまっすぐ外開する作出が行われ、底部には足高の高台が貼り付けられ、塊というよりも高台付塊と呼ぶべきものであろうか。また12は内面に炭化物の付着が認められ、13は胎土が他の土師器に比べ砂質であり、雲母を多く混入している。14は、高台の付かない平底の塊で、内面は横ないし斜方向に細かなヘラミガキが施される。塊は、ロクロ成形による小型のもので、15は、ロクロナデが明瞭に残り、底部は静止糸切りによるものである。16は、底部回転糸切りによるものである。

#### 4号住居址出土土器（第29図17～27、第30図28）

灰釉陶器は、皿（17～21）・碗（22～24）・長頸壺（28）が、土師器は、高台付塊（25、26）・塊（27）の器種構成による出土がみられる。1号住居址同様に、食器類の出土が目立つ。

灰釉陶器の皿は、段皿ではなくやや内湾ぎみに開くもので、17は底部回転ヘラ切りであるのに対し、18～21は回転糸切りによるものである。また20と21は、高台と底部との間に溝を有する作り出しがされるもので、1号住居の4・5と類似性が認められる。碗は、体部が深く内湾を呈する22・23と比べ、24はさほど内湾せず開き、碗というよりもむしろ塊のような形状をするものであり、器厚もやや厚くなっている。28の長頸壺は、頸部から胴中位までの残存であるため全形を知ることはできないが、胴部は球状にふくらみ胴上位で肩が張る。1号住居の11に近い形状をするものではないかと思われる。

土師器の高台付塊は25・26共高台から体部下半部のもので、全形は不明であるが、高台は1号住居のそれと同様に足高の高台である。また25は、胎土・焼成からみて、1号住居の13と共通性が認められる。更に、作図できなかったが、内面黒色処理を施すものも出土している。27の塊は、ロクロ成形による小型品で、底部は回転糸切りによるものである。

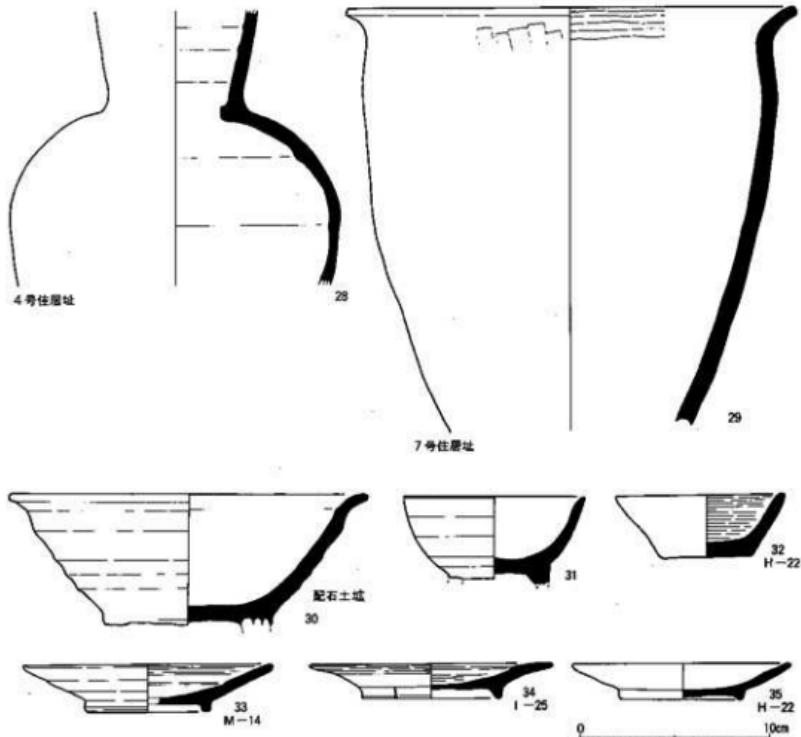
#### 7号住居址出土土器（第30図29）

灰釉陶器と土師器の出土がみられる。灰釉陶器は、高台付碗が出土しているが、図化することができなかつた。土師器は、甕（29）が出土している。

29の甕は、短く口縁部が外反し、胴部はふくらまず逆「ハ」の字状に窄まる形状をする。胴下半部から底部にかけては、輪積みの接合部より欠損している。調整は、内外面ヘラナデによるもので、口縁部内面は、ヘラミガキが施される。

#### 配石土塙出土土器（第30図30、31）

土師器の高台付塊（30）と塊（31）が出土している。



第30図 出土土器実測図 2

30は、体部はほぼまっすぐ外開し、口縁端部で水平ぎみに外反するもので、高台は接合部より欠損する。31は、内湾ぎみに立ち上がる小型のもので、30同様に高台を欠損する。

#### その他グリット出土土器

土器器は壺（32）、灰釉陶器は皿（33～35）がみられる。

32は、小型の壺で1・4号住出土の壺とほぼ同じものである。灰釉陶器の皿は、33は底部回転ヘラキリの段皿で、34は底部回転糸切りの口縁端部が水平状に外反するもので、35は底部回転糸切りの内湾ぎみのものである。

## 2) 鉄 器 (第31図)

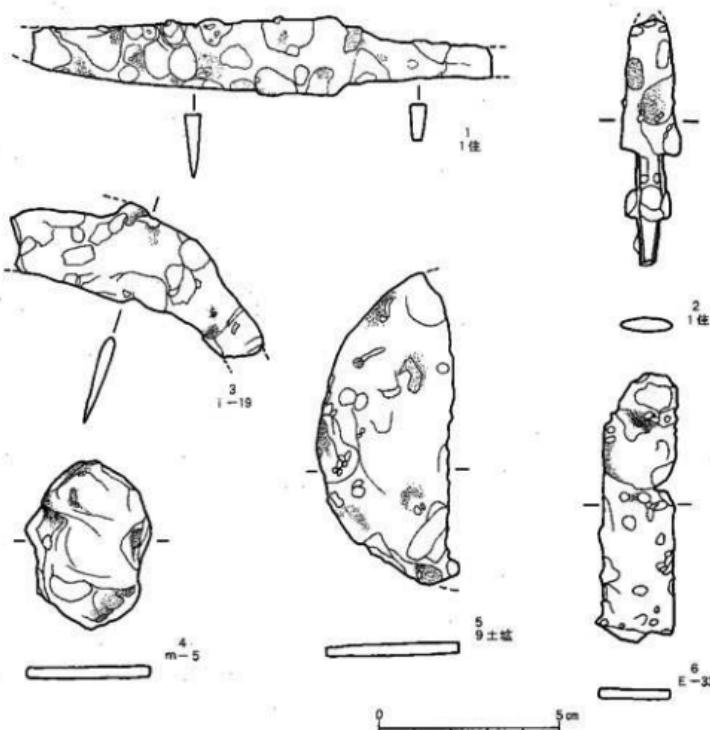
1の刀子は、刃先と茎部を欠損しており、現長12.8cmを測るもの、15cm前後はあったものと思われる。また、鏽による腐食は少ない。

2は、先端部と茎部の下端を欠損するものの、全長約8cmを測ると思われる平根鎌である。刃部は長く、基には止め金具が残存している。

3は、先端部と基部を欠損し全形は不明であるが、大きく湾曲をみせる鉄製の鎌で、全体的に鏽が進行し腐食ぎみである。

4～6は、器種・器形の不明な鉄片である。5は、円形に近い形状をするものである。6は、刀子と思われたが、両側縁部に刃部の作出はみられない。

尚、図化するに至らなかったが、鐵滓500gが出土している。



第31図 出土鉄器実測図

## 第IV章　まとめ

調査結果の概要と調査を実施する段階、並びに、報告書執筆中に気の付いたことを記してまとめてみたい。

箕輪ダム建設に伴う発掘調査は、昭和59年から続けて来たが、今回の調査は当初の調査予定地には入っていなかったものである。その経緯については、第III章に示したように、ダムに使う原石の不良岩石を捨てる場所が新しく必要となり、一之沢地籍がその場所となつたためである。

一之沢地籍は南北と東側を山に囲まれ、西側だけが開いた地形であるため、風当りが無く、山の中としては暖かな場所である。一帯には約2ヘクタール余の畑と水田が位置しており、北西が低くなる傾斜を呈している。遺跡地はこの中に2,000m<sup>2</sup>余に及び、そこを全面発掘を実施した。調査の結果平安時代後半（10～11世紀）の住居址7軒、同時代の配石土塙墓1基、また掘立建造物址1棟、土塙20ヶ所余、及び縄文時代土塙10ヶ所余という遺構が検出されたのである。

### イ) 縄文時代土塙

調査区南東と北西の二ヶ所に見られる。土塙1～5はほぼ一ヶ所に集中している。径1m～1.5mの円形を呈するもので、深さは32～60cmほどである。土塙5号だけは袋状に張り出した形状である。覆土中から黒曜石製のスクレイバーの出土もあり、縄文中期ころの貯蔵穴と考えられる。北西の位置に検出された土塙も、前述のものと同様な形状を示すものが多く、同時期の土塙と考えられる。

### ロ) 住居址

7軒検出されたが、そのうち2ヶ所が重複した形で発見された。時期的には10世紀後半から11世紀にかけてのもので、ほぼ同時期の集落として形成されたと考える。第1号住居址のカマド周辺から拳大の鉄滓が三個検出されている。製鉄に關係した住居址なのであろうか。それに類する出土遺物は見られないが、刀子などの鐵製品が若干見られた。この住居址は北壁にカマドを構築したが、東壁に移築したと考えられる。この例は第3号住居址にも見られる。自然条件や住居址内の都合により、移動の必要性が生じたのであろう。カマド構築の様子はいずれも共通点が見られるが、第1・3号住居址のカマドは遺存状態は良くない。笑いた時の様子が最も良好に残っていたのが、第7号住居址のカマドで、袖部、支脚等非常に良い状況であり、石芯カマドの典型である。7軒の住居址のうち第2号住居址はカマドは認められない。6軒の住居址のうち南壁に構築したものが3軒、東壁が2軒、北壁が1軒という状況である。このうち2軒はカマドを移している。この状況から谷間の地形は、風向きなどが一定しないところから、住居の設定にも齊一性は見られない。

#### **ハ) 据立建造物址**

調査区中央の土塙群の中に検出された。東西の棟と平行して南側に廊を設定しているもので珍しい形態を示している。笑輪町内における天竜川東側の台地では初見の形式である。

#### **ニ) 配石土塙墓**

土塙群の北西角に位置しており、出土遺物は周囲の住居址の時期とほぼ同時期であり、この住居址に伴うものと考えられる。この遺構は福与大原地籍で若干見られたが、あまり数多くはない。また土塙集中群であるが、性格が決定できるようなものは少なく、齊一性は見られない。またこの中に混って柱穴址と思われるものが多く見られるが、発掘中においては、規則性を持つものとして関連付けができない状況であった。

遺構が集中する場所は、いつの時代においても同じことであり、縄文時代からほぼ同様な場所を繰り返し利用している。

遺跡全体を通してこの遺構・遺物を見た時、大きく分けて縄文時代前期中頃、中期初頭、平安時代後半の三時期の生活があったと推定される。前期遺物は若干であるため、住居を設定した生活があったかは不明である。平安時代後半の集落として、生活の基盤を何に求めていたのであろうか。農耕を積極的に行なうには地形が悪い。山に依存したのであろうか。また隠田集落的な性格を持っていたのか。今後の研究に待ちたい。

終わりに、本調査実施につき、長野県伊那建設事務所担当課をはじめ、調査に参加ご協力下さった調査団員の皆様方に深く感謝を申し上げます。

付表1. 出土土器一覧表

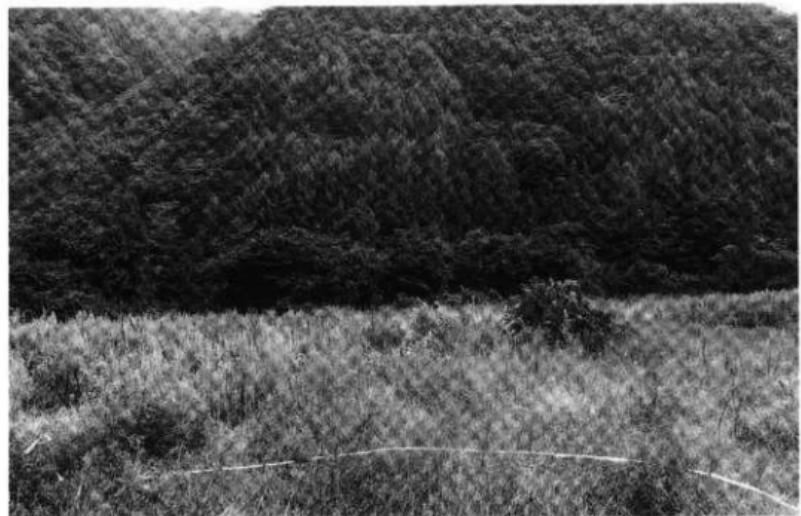
No.	出土地点	器種器形	法量(cm)			残存%	成形・調整・形態の特徴	色調		備考
			口径	底径	器高			外面	内面	
1	1号住	灰釉陶器皿(段皿)	12.3	7.3	2.3	100	外面—ロクロナデ、底部回転ヘラ切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	灰白色	淡緑色	
2	1号住	灰釉陶器皿(段皿)	12.0	6.8	2.4	100	外面—ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	白色	白色	
3	1号住	灰釉陶器皿(段皿)	14.5	8.4	2.3	50	外面—ロクロナデ、底部回転ヘラ切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	灰白色 白色	灰白色 白色	
4	1号住 カマドA	灰釉陶器皿	12.0	6.8	2.8	75	外面—ロクロナデ、底部回転ヘラ切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	白色	白色	
5	1号住 カマドA	灰釉陶器皿	11.0	6.3	1.8	50	外面—ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	白色	白色	
6	1号住	灰釉陶器皿	12.0	7.0	2.1	100	外面—ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	灰白色	灰白色 淡緑色	
7	1号住	灰釉陶器碗	11.0	6.8	4.0	50	外面—ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	灰白色	白色	
8	1号住	灰釉陶器碗	12.0	6.8	3.4	50	外面—ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	灰白色	淡緑色	
9	1号住	灰釉陶器碗	12.6	6.8	4.8	100	外面—ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	灰白色	灰白色 淡緑色	
10	1号住	灰釉陶器碗	—	7.5	(4.3)	50	外面—ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	灰白色	淡緑色	
11	1号住	灰釉陶器長頸壺	6.5	5.0	11.5	90	外面—ロクロナデ後ヘラグズリ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	淡緑色 灰白	淡緑色 灰白	
12	1号住	土師器塊	14.3	7.2	5.7	100	外面—ロクロナデ、底部回転糸切り?高台(足高)貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	乳橙色	乳橙色	砂質 雲母を含む
13	1号住	土師器塊	—	6.8	(4.0)	30	外面—ロクロナデ、底部回転糸切り?高台(足高)貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	
14	1号住	土師器塊	11.7	5.8	5.5	50	外面—ロクロナデ、底部静止糸切り 内面—ロクロナデ後ヘラミガキ	明茶褐色	明茶褐色	
15	1号住	土師器塊	10.5	4.7	3.5	100	外面—ロクロナデ、底部静止糸切り 内面—ロクロナデ	黄褐色	黄褐色	
16	1号住	土師器塊	9.7	5.1	3.5	75	外面—ロクロナデ、底部回転糸切り 内面—ロクロナデ	明茶褐色	明茶褐色	
17	4号住	灰釉陶器皿	12.0	5.3	3.0	100	外面—ロクロナデ、底部回転ヘラ切り高台貼り付け後ナデ 内面—ロクロナデ	灰白色 淡緑色	灰白色 淡緑色	

No	出土地点	器種器形	法量(cm)			費存%	成形・調整・形態の特徴	色 調		備考
			口径	底径	器高			外 面	内 面	
18	4号住	灰釉陶器皿	12.5	8.0	2.5	75	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	白色 白色	白色 白色	
19	4号住	灰釉陶器皿	12.0	7.4	1.9	50	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	灰色 灰色	灰色 灰色	
20	4号住	灰釉陶器皿	12.5	7.6	2.2	100	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	灰白色 灰白色	白色 白色	
21	4号住	灰釉陶器皿	12.0	7.2	2.0	90	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	白色 白色	白色 白色	
22	4号住	灰釉陶器碗	15.4	8.5	6.0	50	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り?高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	灰白色 白色	灰白色 白色	
23	4号住	灰釉陶器碗	15.2	7.3	6.3	75	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	灰白色 灰白色	淡綠色 白色	
24	4号住	灰釉陶器碗	16.0	8.3	5.0	50	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	白色 黑色	灰白色 灰色	外面に一部炭化物付着
25	4号住	土師器塊	—	7.5	(3.0)	30	外面一ロクロナデ高台(足高)貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	乳橙色 乳橙色	乳橙色 乳橙色	砂質 雲母を含む
26	4号住	土師器塊	—	6.8	(4.0)	30	外面一ロクロナデ高台(足高)貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	茶褐色 茶褐色	茶褐色 茶褐色	
27	4号住	土師器塊	10.5	4.7	4.3	50	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り 内面一ロクロナデ	茶褐色 茶褐色	茶褐色 茶褐色	
28	4号住	灰釉陶器長頸壺	—	—	(14.5)	30	外面一ロクロナデ 内面一ロクロナデ	淡綠色 白色	白色 白色	
29	7号住	土師器甕	23.6	—	(22.4)	75	外面一ヘラナデ 内面一口縁部へラミガキ、胴部ヘラナデ	暗茶褐色 黑褐色	茶褐色 茶褐色	外面炭化物付着
30	配石土塙	土師器甕	19.0	—	(6.8)	75	外面一ロクロナデ、底脚回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	暗茶褐色 茶褐色	茶褐色 茶褐色	外面炭化物付着
31	配石土塙	土師器塊	9.7	—	(4.6)	75	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	暗茶褐色 茶褐色	茶褐色 茶褐色	
32	H-22	土師器塊	9.0	4.8	3.3	100	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り 内面一ロクロナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	暗茶褐色 暗茶褐色	
33	M-14	灰釉陶器皿(段皿)	13.2	6.7	2.4	50	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	
34	I-25	灰釉陶器皿(段皿)	13.0	7.4	2.4	50	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	灰色 灰色	灰色 灰色	
35	H-22	灰釉陶器皿	11.0	6.5	1.9	75	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り高台貼り付け後ナデ 内面一ロクロナデ	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	

# 図 版



遺跡遠景



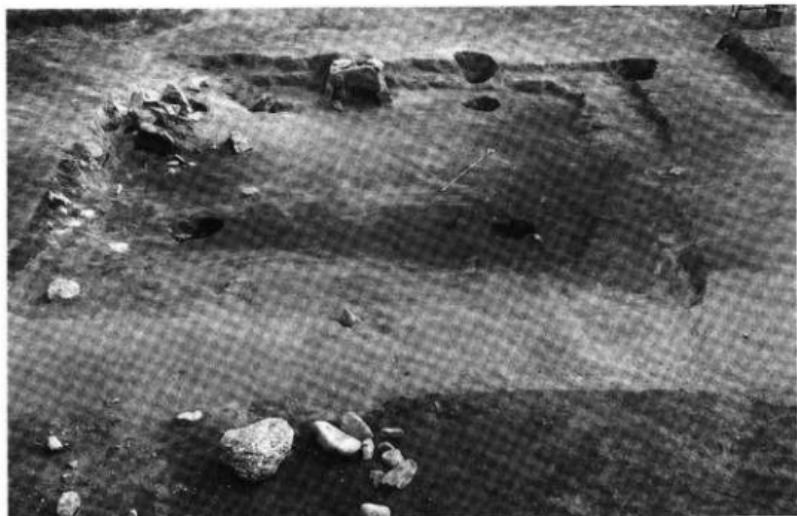
遺跡近景



調査区全景



グリッド状況



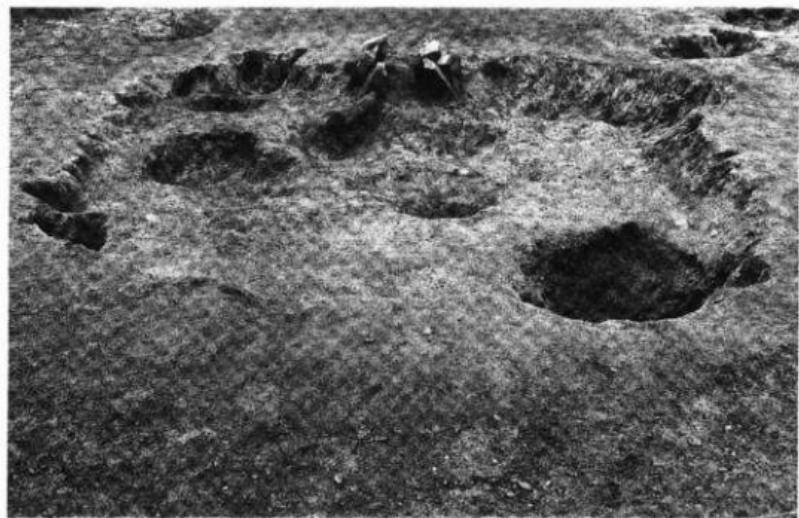
第1・7号住居址



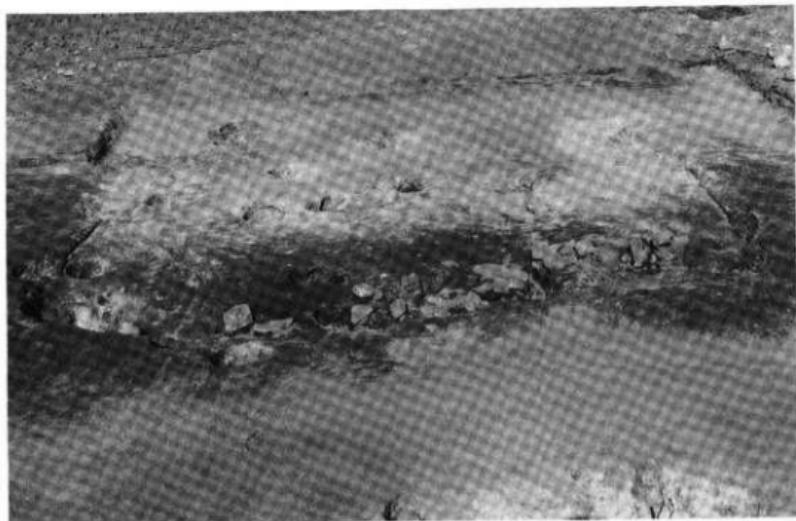
第2号住居址



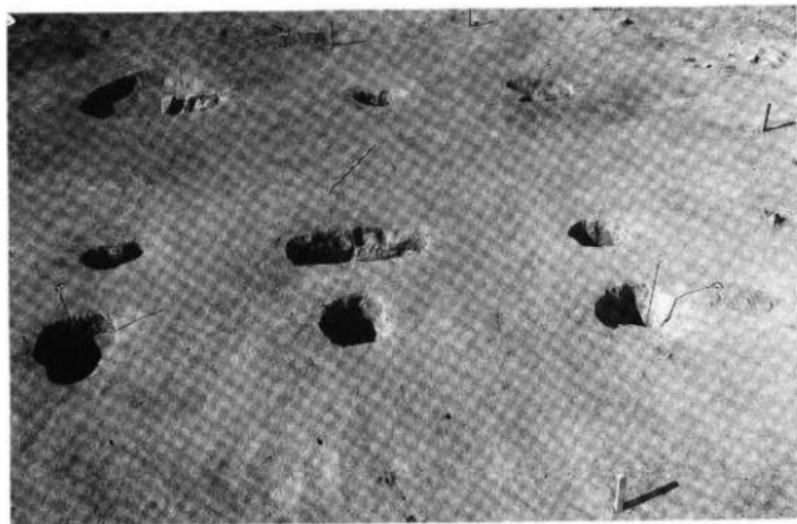
第3号住居址



第4号住居址



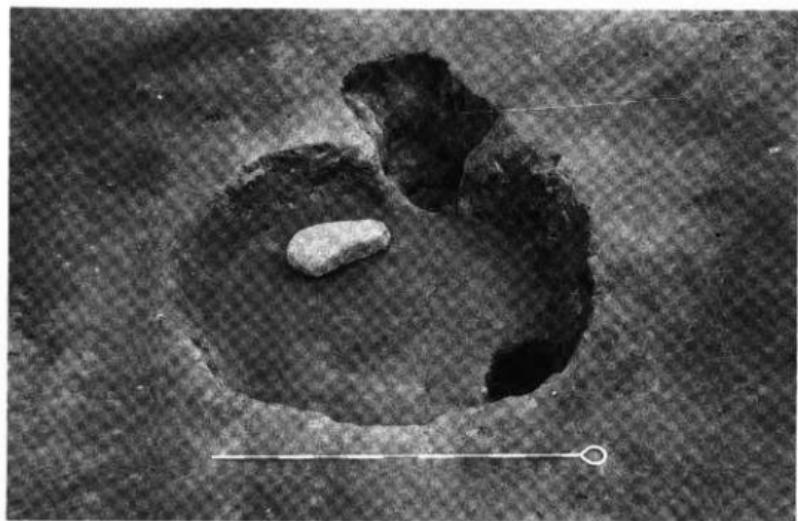
第5・6号住居址



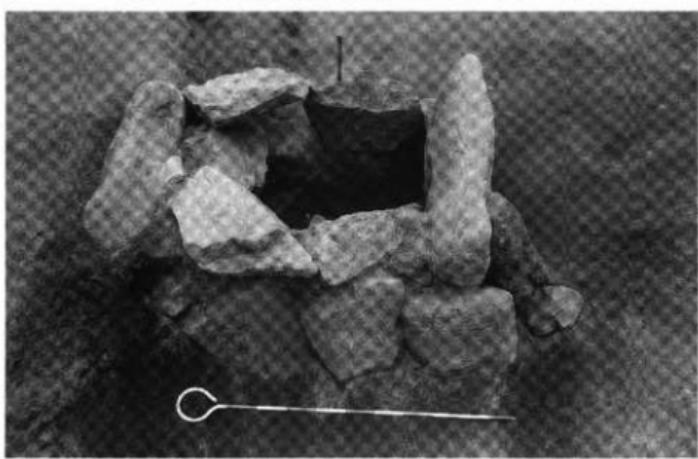
掘立建造物址



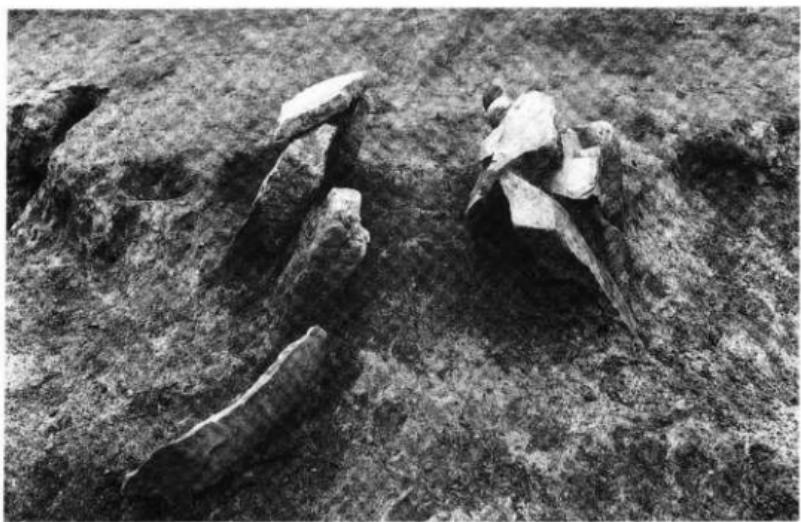
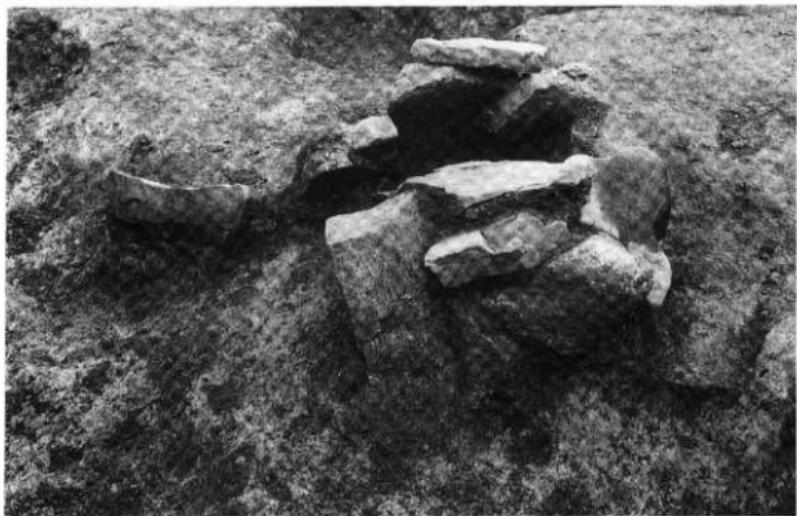
配石土塚墓上面



配石土塚墓



第7号住居址カマド



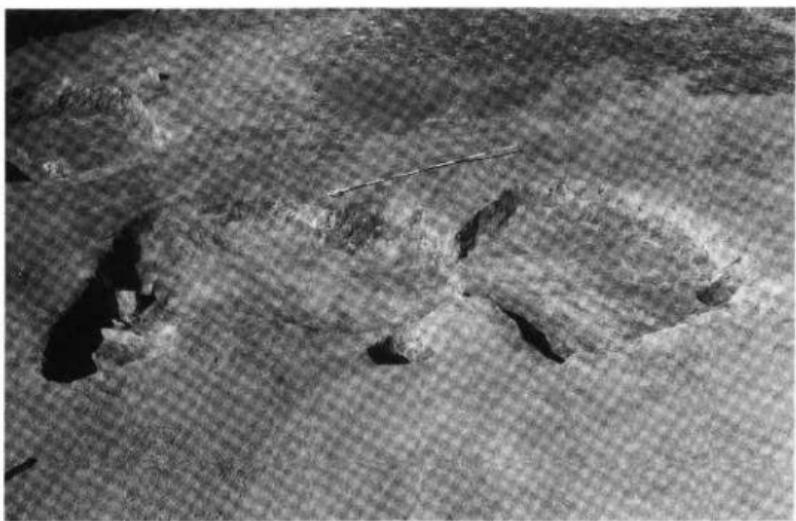
第4号住居址カマド



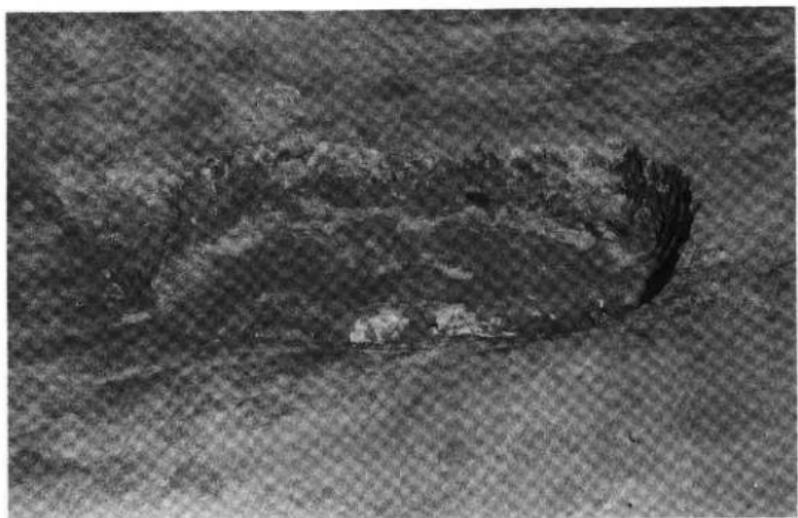
第5・6号住居址カマド



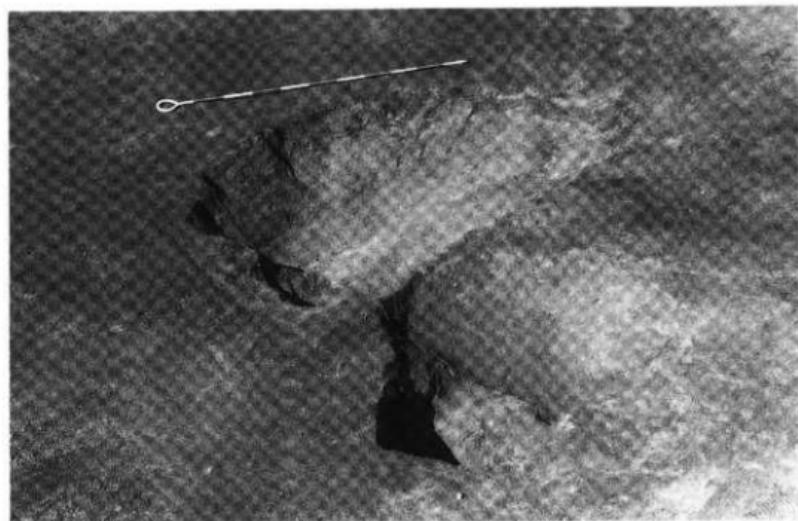
1 · 2 · 3 号土坡



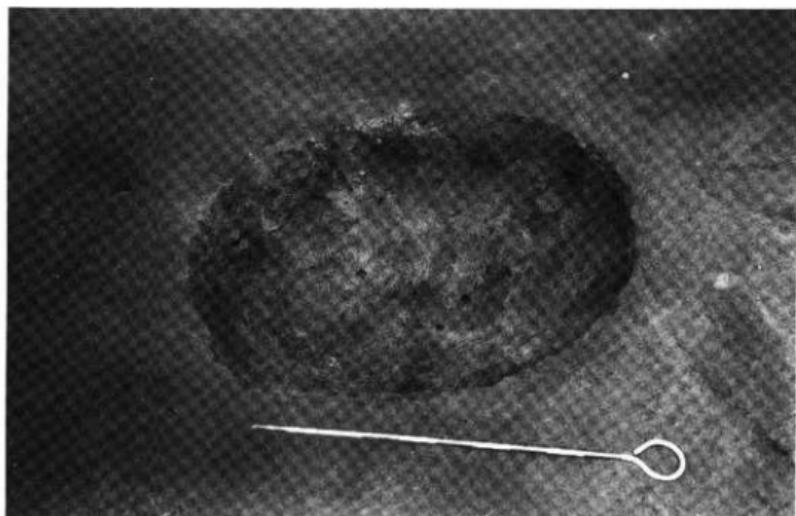
6 · 7 · 8 号土坡



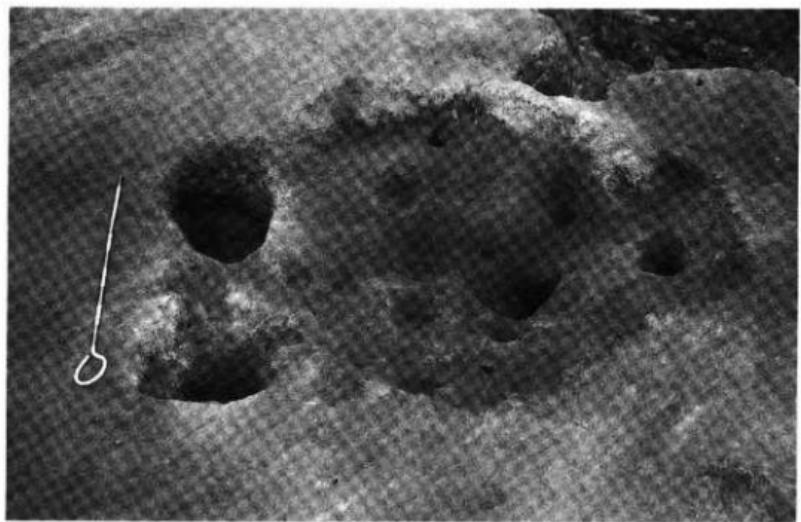
9号土坡



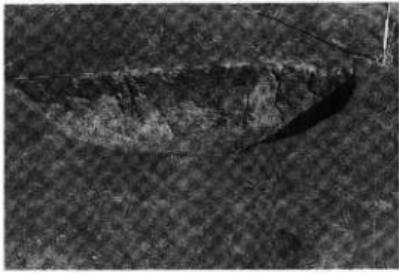
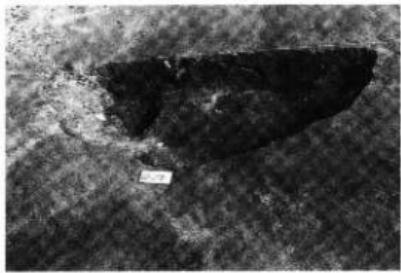
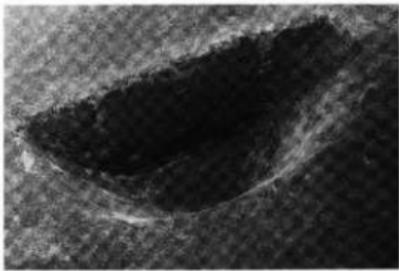
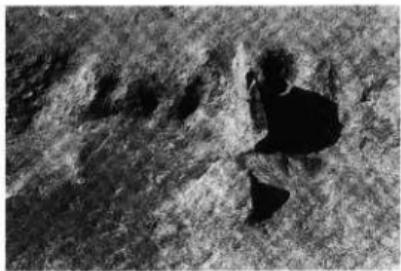
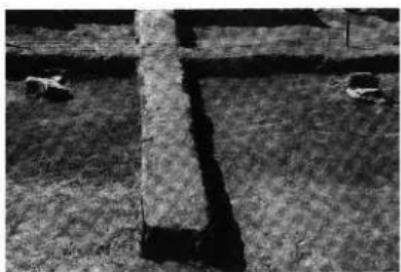
14号土坡



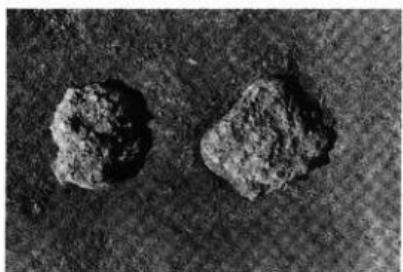
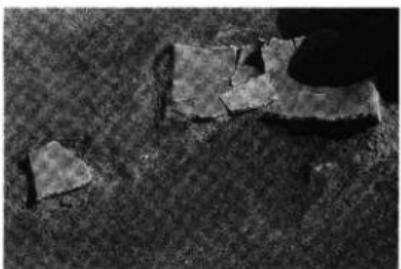
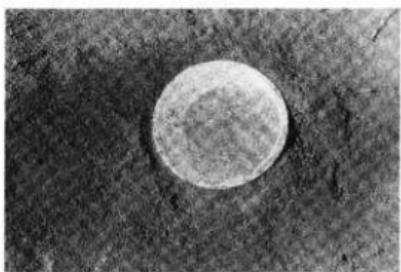
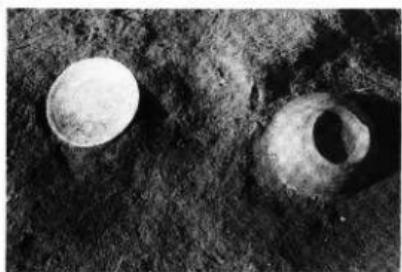
17号土塙



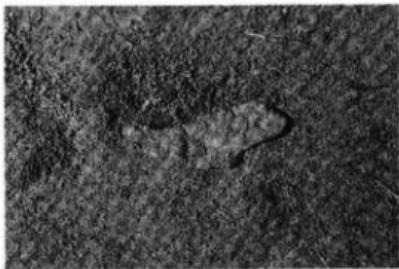
18号土塙



調査状況



遺物出土狀況 1



遺物出土狀況 2



調査風景